高等学校教科書「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」における近・現代短歌教材

貞　光　　威

Tanka as Teaching Materials in Senior High school Textbooks Japanese I and II

Takeshi Sadamitsu

Received Apr. 30. 1996

要　　旨

高等学校で現在使用されている教科書「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」において，近・現代短歌の教材がどのように扱われているかを，各出版社から発行されているすべての教科書26種類について調査した。すなわち，教材の組み立て方・収録短歌数・誰のどの短歌を載せているか・第２次世界大戦後に作られた短歌を何首掲載しているか・多くの教科書に採用されている短歌は，どの歌人のどの歌か，などについて調査し，10年前に調査したときと比べて，一部の教科書ではあるが，いろいろな新しい試みがなされていることを探り，その可能性と問題点について考察した。

キーワード：高等学校　教科書　短歌

1，は　じ　め　に

この稿は，現行の高等学校の国語教科書「国語Ⅰ」および「国語Ⅱ」において，近・現代短歌に関する教材がどのように取り扱われているかを，各出版社から発行されているすべての教科書26種を対象にして調査し，その特色と問題点について考察したものである。

高等学校の「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」という科目は，1978年（昭和53年）に改訂された「高等学校学習指導要領」に基づいて新設された科目で，この指導要領に基づいて編集された高等学校用教科書は，「国語Ⅰ」の場合，1981年の検定に合格したものが1982年度から現場で使用されるようになり，「国語Ⅱ」は1992年の検定に合格したものが1983年度から使用されるよう

になった。その後，「国語Ⅰ」も「国語Ⅱ」も，それぞれ3年を経て，その改訂版が作られ，多少の変更はあったが，それほど大きな変更は見られなかった。

ところが，1989年（平成元年）に再び「高等学校学習指導要領」が改訂され，それに基づいて新しく教科書も編集しなおされ，「国語Ⅰ」の場合，1993年の検定に合格したものが1994年度から現場で使用されるようになり，「国語Ⅱ」は1994年の検定に合格したものが1985年度から使用されるようになって，現在に至っている。この現行の教科書は，名称は従来の「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」と同じではあるが，内容には相当の違いが見られる。

稿者は今から10年前の1986年9月に，今回とほぼ同じ方法によって，1978年(昭和53年)に改訂された「高等学校学習指導要領」に基づいて編集され，当時，使用されていた「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」について近代短歌に関する教材がどのように取り扱われているかを，各出版社から発行されているすべての教科書17種を対象にして調査し，その特色と問題点について考察している。今回は調査の結果を，前回のそれと比較しながら検討することにしたい。

今回，考察の対象として取り扱うことにした「国語Ⅰ」および「国語Ⅱ」の教科書は，下の〔表1〕のように，13の出版社から発行された26種類である。この表の26種類の教科書の配列の順序は，文部省発行の『高等学校教科書目録』における配列の順序に従った。　なお，右文書院発行の，Nの「高等学校新国語Ⅰ」およびOの「高等学校国語Ⅰ」の場合は，「高等学校新国語Ⅱ」「高等学校国語Ⅱ」という教科書がなく，次の学年ではいずれの場合も「高等学校総合国語Ⅱ」を使用することになっている。そのため「高等学校新国語Ⅰ」と「高等学校総合国語Ⅱ」を組み合わせたものをNとし，「高等学校国語Ⅰ」と「高等学総合国語Ⅱ」を組み合わせたものをOとした。

また，〔表1〕には発行所・書名・著作者のほかに，「教科書の略称」を記した。これは，あとの〔表5〕「歌人別掲載短歌一覧表」において，それぞれの短歌がどの教科書に掲載されているかを一覧表の形で示すときの便宜のためである。なお，文部省発行の『高等学校教科書目録』にも漢字2字または3字の略称が記されているが，それは「発行所の略称」であって，この〔表1〕の「教科書の略称」と同じではない。1社から2種類以上の国語教科書を出している場合に，それぞれの教科書を区別するために，教科書別に略称を作った。略称はすべて漢字2字に統一した。

表1　「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」教科書一覧

記号	発行所	書名	教科書の略称	著作者
A	日本書籍株式会社	新版高等国語Ⅰ・Ⅱ	日書	大久保典夫ほか13名
B	東京書籍株式会社	国語Ⅰ・Ⅱ	東書	吉田熙生ほか18名
C	東京書籍株式会社	新編国語Ⅰ・Ⅱ	東新	吉田熙生ほか18名

D	学校図書株式会社	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	学図	阿川弘之・野家潤家ほか17名
E	学校図書株式会社	基礎国語Ⅰ・Ⅱ	学基	阿川弘之・野家潤家ほか17名
F	株式会社　三省堂	国語Ⅰ・Ⅱ	三省	廣末保・金谷治ほか10名
G	株式会社　三省堂	明解国語Ⅰ・Ⅱ	三明	柴田武ほか９名
H	教育出版株式会社	国語Ⅰ・Ⅱ	教出	加藤周一・柳井滋・浅井清ほか10名
I	株式会社　大修館書店	高校生国語Ⅰ・Ⅱ	大修	平岡敏夫・北原保雄・田口和夫ほか24名
J	株式会社　大修館書店	高等学校新国語Ⅰ・Ⅱ	大新	平岡敏夫・北原保雄・田口和夫ほか24名
K	株式会社　大修館書店	現代の国語Ⅰ・Ⅱ	大現	平岡敏夫・北原保雄・田口和夫ほか24名
L	株式会社　明治書院	高校生の国語Ⅰ・Ⅱ	明治	紅野敏郎・築島裕・久保田淳ほか31名
M	株式会社　明治書院	精選新国語Ⅰ・Ⅱ	明精	紅野敏郎・築島裕・久保田淳ほか31名
N	株式会社　右文書院	高等学校新国語Ⅰ 高等学校総合国語Ⅱ	右新	助川徳是・高橋和夫ほか13名
O	株式会社　右文書院	高等学校国語Ⅰ 高等学校総合国語Ⅱ	右文	田島毓堂・中村幸弘ほか９名
P	株式会社　筑摩書房	国語Ⅰ・Ⅱ	筑摩	秋山虔・猪野謙二・分銅惇作ほか６名
Q	株式会社　筑摩書房	新編国語Ⅰ・Ⅱ	筑新	秋山虔・猪野謙二・分銅惇作ほか６名
R	株式会社　角川書店	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	角川	吉川泰雄・大野晋・山田俊雄ほか17名
S	株式会社　旺文社	新国語Ⅰ・Ⅱ	旺新	松村明・山田有策・中村幸弘・松岡栄志ほか６名
T	株式会社　旺文社	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	旺文	松村明・岡保生・安西廸夫・尾上兼英ほか７名
U	株式会社　尚学図書	新選国語Ⅰ・Ⅱ	尚選	大岡信・徳川宗賢・長尾高明・野山嘉正ほか14名
V	株式会社　尚学図書	標準国語Ⅰ・Ⅱ	尚標	大岡信・徳川宗賢・長尾高明・野山嘉正ほか14名
W	株式会社　尚学図書	新国語Ⅰ・Ⅱ	尚新	大岡信・徳川宗賢・長尾高明・野山嘉正ほか14名
X	株式会社　第一学習社	高等学校新編国語Ⅰ・Ⅱ	一新	稲賀敬二・市川孝・竹盛天雄ほか26名
Y	株式会社　第一学習社	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	第一	稲賀敬二・市川孝・竹盛天雄ほか26名
Z	株式会社　第一学習社	高等学校新訂国語Ⅰ・Ⅱ	一訂	稲賀敬二・市川孝・竹盛天雄ほか26名

2，各教科書における近・現代短歌教材

まず初めに，26種類の教科書がそれぞれ近・現代短歌教材にどの程度の比重を置いている

かを大まかに知る手がかりとして，収載する近・現代短歌作品の数と，近・現代短歌の鑑賞文を載せているか否かを調べてみると，下の〔表2〕のようになる。

表2　収載する近代短歌の数と鑑賞文等の有無

記号	発行所	書名	作品		鑑賞文		
			国1	国2	国語1	国語2	合計
A	日本書籍	新版高等国語Ⅰ・Ⅱ	12	—	—	近代の相聞と挽歌13 佐佐木幸綱	25
B	東京書籍	国語Ⅰ・Ⅱ	10	30	—	—	40
C	東京書籍	新編国語Ⅰ・Ⅱ	8	12	—	—	20
D	学校図書	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	27	／	—	—	27
E	学校図書	基礎国語Ⅰ・Ⅱ	9	／	短歌を作ろう　2	／	11
F	三省堂	国語Ⅰ・Ⅱ	18	／	—	／	18
G	三省堂	明解国語Ⅰ・Ⅱ	17	19	—	—	36
H	教育出版	国語Ⅰ・Ⅱ	10	15	折々のうた　3 大岡　信	—	28
I	大修館	高校生国語Ⅰ・Ⅱ	16	16	—	—	32
J	大修館	高等学校新国語Ⅰ・Ⅱ	20	23	—	—	43
K	大修館	現代の国語Ⅰ・Ⅱ	20	20	—	—	40
L	明治書院	高校生の国語Ⅰ・Ⅱ	15	15	—	—	30
M	明治書院	精選新国語Ⅰ・Ⅱ	15	15	—	—	30
N	右文書院	高等学校新国語Ⅰ 高等学校総合国語Ⅱ	16	21	魅力ある歌と出会う1 馬場あき子	—	38
O	右文書院	高等学校国語Ⅰ 高等学校総合国語Ⅱ	16	21	魅力ある歌と出会う1 馬場あき子	—	38
P	筑摩書房	国語Ⅰ・Ⅱ	／	33	／	白秋と母　4 大庭みな子	37
Q	筑摩書房	新編国語Ⅰ・Ⅱ	24	／	—	／	24
R	角川書店	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	20	31	—	—	51

S	旺　文　社	新国語Ⅰ・Ⅱ	20	／	—	／	20
T	旺　文　社	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	20	／	私の好きな初恋の詩1 俵　万智	／	21
U	尚学図書	新選国語Ⅰ・Ⅱ	18	18	—	—	36
V	尚学図書	標準国語Ⅰ・Ⅱ	16	15	—	—	31
W	尚学図書	新国語Ⅰ・Ⅱ	14	／	—	／	14
X	第一学習社	高等学校新編国語Ⅰ・Ⅱ	18	／	—	／	18
Y	第一学習社	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	18	／	—	／	18
Z	第一学習社	高等学校新訂国語Ⅰ・Ⅱ	18	／	—	／	18

上の〔表2〕の「短歌」および「鑑賞文」の欄の斜線［／］は，その教科書に近・現代短歌を扱う単元が設けられていないことを示す。また，「短歌」または「鑑賞文」の欄の横線［—］は，その教科書に近・現代短歌を扱う単元が設けられてはいるが，そこに短歌あるいは鑑賞文の類が載せれていないことを示す。なお，鑑賞文の題名の後の数字は，その鑑賞文中に引用された短歌の数を示す。

この表を見てわかるように，26種類の教科書は，いずれも少なくとも「国語Ⅰ」か「国語Ⅱ」のどちらかにおいて，近・現代短歌を教材として載せており，半数を超える15種類の教科書では，「国語Ⅰ」と「国語Ⅱ」の両方に近・現代短歌の教材を置いている。

「国語Ⅰ」と「国語Ⅱ」の両方に近・現代短歌の教材を置いている教科書の中には，R角川書店の「高等学校国語Ⅰ・Ⅱ」の51首，J大修館の「高等学校新国語Ⅰ・Ⅱ」の43首などのように，かなり多くの近・現代短歌を載せている教科書が見られる。載せている近・現代短歌の比較的に多い教科書を，その数の多い順に示すと，下記のとおりである。ただし，短歌の数の中には，鑑賞文の中に引用された短歌も含む。

R	角川書店	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	51首
J	大修館	高等学校新国語Ⅰ・Ⅱ	43首
B	東京書籍	国語Ⅰ・Ⅱ	40首
K	大修館	現代の国語Ⅰ・Ⅱ	40首
N	右文書院	高等学校新国語Ⅰ・高等学校総合語Ⅱ	38首
0	右文書院	高等学校国語Ⅰ・高等学校総合語Ⅱ	38首
P	筑摩書房	国語Ⅰ・Ⅱ	37首
G	三省堂	明解国語Ⅰ・Ⅱ	36首

U	尚学図書	新選国語Ⅰ・Ⅱ	36首

反対に，載せている近･現代短歌の数の少ないものとしては，E学校図書の「基礎国語Ⅰ・Ⅱ」の11首，A日本書籍の「新版高等国語Ⅰ・Ⅱ」の12首，W尚学図書の「新国語Ⅰ・Ⅱ」の14首が目立つ。載せている近・現代短歌の比較的に少ない教科書を，その数の少ない順に示すと，下記のとおりである。

E	学校図書	基礎国語Ⅰ・Ⅱ	11首
A	日本書籍	新版高等国語Ⅰ・Ⅱ	12首
W	尚学図書	新国語Ⅰ・Ⅱ	14首
F	三省堂	国語Ⅰ・Ⅱ	18首
X	第一学習社	高等学校新編国語Ⅰ・Ⅱ	18首
Y	第一学習社	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	18首
Z	第一学習社	高等学校新訂国語Ⅰ・Ⅱ	18首

「国語Ⅰ」と「国語Ⅱ」とを合わせると，26種類の教科書には，延べにして736首の近･現代短歌が収められているから，教科書1種類あたりの平均収載歌数は28,3首ということになる。

「国語Ⅰ」･「国語Ⅱ」の教科書の中には，近・現代短歌の単元に，短歌作品のほかに近・現代短歌に関する鑑賞文を載せているものがあり，現行の教科書では次のように6編の文章を載せている。

A	日本書籍	新版高等国語Ⅱ	佐佐木幸綱	近代の相聞と挽歌	13首
E	学校図書	基礎国語Ⅰ・Ⅱ	編　者	短歌を作ろう	2首
H	教育出版	国語Ⅰ	大岡　信	折々のうた	3首
N	右文書院	高等学校新国語Ⅰ	馬場あき子	魅力ある歌と出会う	1首
0	右文書院	高等学校国語Ⅰ	馬場あき子	魅力ある歌と出会う	1首
P	筑摩書房	国語Ⅱ	大庭みな子	白秋と母	4首
T	旺文社	高等学校国語Ⅰ	俵　万智	私の好きな初恋の詩	1首

この近・現代短歌の鑑賞文の中では，日本書籍の「新版高等国語Ⅱ」に，短歌13首について述べた佐佐木幸綱の「近代の相聞と挽歌」が載っているのが注目される。この文章は，「晶子と茂吉」という副題がついていて，前半には「君も雛罌粟（ユクリコ）」と見出しが付けられ，与謝野晶子の「ああ皐月（さつき）仏蘭西（フランス）の野は火の色す君も雛罌粟われも雛罌粟」の歌を中心にして，晶子の鉄幹への夫恋（つまごい）の歌が生まれた事情について説明し，鑑賞している。後半は「蚕（かふこ）のねむり」

と見出しが付けられ，斎藤茂吉の連作「死にたまふ母」の中の「母が目をしまし離(か)れ来て目守(まも)りたりあな悲しもよ蚕のねむり」の歌を中心にして，茂吉の挽歌が生まれた事情について説明し，鑑賞している。

これまで見てきたように，26種類の教科書の中には，「国語Ⅰ」か「国語Ⅱ」のどちらか一方で近・現代短歌を扱うものもあり，また両方で扱うものもある。そのほかに，短歌を鑑賞した文章を載せるものもあって，短歌の扱い方は多様である。そのために，教科書で近・現代短歌について用いているページ数も4ページから15ページまで教科書によって差がある。各教科書が近・現代短歌にどの程度の比重を置いているかを知るおおよその目やすとして，近・現代短歌にさいているページ数を調べたものが次の〔表3〕である。ただし，この数字はごくおおまかなもので，厳密なものではない。教科書の多くはA5判であるが，中にはB5判のものも6種類あり，版型によって1ページの字

表3　近・現代短歌のために用いられたページ数

記号	発行所	書名	国語1	国語2	合計
A	日本書籍	新版高等国語Ⅰ・Ⅱ	4	9	13
B	東京書籍	国語Ⅰ・Ⅱ	3	6	9
C	東京書籍	新編国語Ⅰ・Ⅱ	3	3	9
D	学校図書	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	12	／	12
E	学校図書	基礎国語Ⅰ・Ⅱ	6	／	6
F	三省堂	国語Ⅰ・Ⅱ	6	／	6
G	三省堂	明解国語Ⅰ・Ⅱ	2	4	6
H	教育出版	国語Ⅰ・Ⅱ	6	3	9
I	大修館	高校生国語Ⅰ・Ⅱ	4	4	8
J	大修館	高等学校新国語Ⅰ・Ⅱ	8	7	15
K	大修館	現代の国語Ⅰ・Ⅱ	4	4	8
L	明治書院	高校生の国語Ⅰ・Ⅱ	6	8	14
M	明治書院	精選新国語Ⅰ・Ⅱ	5	5	10
N	右文書院	高等学校新国語Ⅰ 総合国語Ⅱ	7	7	14
O	右文書院	高等学校国語Ⅰ 総合国語Ⅱ	7	7	14
P	筑摩書房	国語Ⅰ・Ⅱ	／	13	13
Q	筑摩書房	新編国語Ⅰ・Ⅱ	6	／	6
R	角川書店	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	7	8	15
S	旺文社	新国語Ⅰ・Ⅱ	5	／	5
T	旺文社	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	6	／	6
U	尚学図書	新選国語Ⅰ・Ⅱ	5	6	11
V	尚学図書	標準国語Ⅰ・Ⅱ	5	5	10
W	尚学図書	新国語Ⅰ・Ⅱ	6	／	6
X	第一学習社	高等学校新編国語Ⅰ・Ⅱ	4	／	4
Y	第一学習社	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	6	／	6
Z	第一学習社	高等学校新訂国語Ⅰ・Ⅱ	6	／	6

数も違う。また，教科書によっては，１ページに短歌を10首とかそれ以上を載せているのがある一方では，挿絵や写真を入れて，１ページに２首を載せているだけといった場合もあるからである。

なお，教科書の中には，学校図書の「基礎国語Ｉ」のように，「和歌の流れ」として，万葉集・古今集・新古今集などの古典和歌から近・現代短歌まで並べて，同じ単元で扱う教科書があり，鑑賞文の中には，短歌のほかに俳句もいっしょに扱ったものもあるが，その場合は，近・現代短歌に関する部分のみのページ数を概算した。

３，どの歌人の歌を採っているか

前の第２章では，それぞれの教科書が近・現代短歌を何首ほど教材として載せているか，そしてそのために約何ページをあてているか，ごくおおまかに眺めたが，この章では，もう少し詳しく，どの歌人のどの作品を近・現代短歌教材として採っているかを調べることにする。

その手はじめとして，最初に26種類のそれぞれの教科書について，近・現代短歌の単元の構成を眺めた上で，どの歌人の短歌は何首載せられているか，また，作品のうちで，戦後に詠まれたものはどのくらい収められているかについて調べてみることにしたい。いくらか前の章の記述と重複する点があるが，それぞれの教科書の特色を明らかにするために，改めて記すことにする。

Ａ　日本書籍「新版高等国語Ｉ・II」

「国語Ｉ」には，「12　近代の短歌と俳句」の単元で，「青春のいたみ」と題して石川啄木と寺山修司の短歌を６首ずつ，計12首を掲載する。

「国語II」には佐佐木幸綱の筆になる鑑賞文「近代の相聞と挽歌」が掲載され，与謝野晶子の歌５首と斎藤茂吉の歌８首の計13首が採られている。

「国語Ｉ」に載せられた寺山修司の短歌６首が戦後の作品である。

Ｂ　東京書籍「国語Ｉ・II」

「国語Ｉ」では「七　詩歌」の単元で，「十五の心」と題して石川啄木と正岡子規の短歌を５首ずつ，計10首を掲載する。

「国語II」には「四　詩歌」の単元で「くれなゐの――短歌抄」と題して正岡子規・長塚節・与謝野晶子・島木赤彦・若山牧水・斎藤茂吉・会津八一・宮柊二・近藤芳美・寺山修司の10名の短歌を３首ずつ，計30首を掲載する。

戦後の作品は，「国語II」に載せられた宮柊二・近藤芳美・寺山修司の短歌，計９首である。

C　東京書籍「新編国語Ⅰ・Ⅱ」

「国語Ⅰ」では「十　青春の歌」の単元で，「その子二十」と題して与謝野晶子・石川啄木・若山牧水・斎藤茂吉・宮柊二・近藤芳美・寺山修司・佐佐木幸綱の８名の短歌を１首ずつ，計８首を掲載する。

「国語Ⅱ」では「九　心のうた」の単元で，「冬の力」と題して正岡子規・長塚節・北原白秋・釈迢空・岡井隆・馬場あき子の６名の短歌を２首ずつ，計12首を掲載する

戦後の作品は，「国語Ⅰ」の載せられた宮柊二・近藤芳美・寺山修司・佐佐木幸綱の４首，「国語Ⅱ」の岡井隆・馬場あき子の４首，計８首である。

D　学校図書「高等学校国語Ⅰ・Ⅱ」

近・現代短歌は「国語Ⅰ」だけに載せる。「11　短歌」の単元は，「死にたまふ母」と「近代の短歌」との二つの章よりなる。まず，「死にたまふ母」の章では連作の中の８首を載せ，「近代の短歌」では，正岡子規・伊藤左千夫・与謝野晶子・長塚節・北原白秋・若山牧水・石川啄木・釈迢空の８名の短歌を２首ずつ，計16首を載せた後，〔参考〕として，「現代の短歌」と題して塚本邦雄・岡井隆・俵万智の３名の短歌を１首ずつ，計３首を掲載する。この３首が戦後の作品である。

E　学校図書「基礎国語Ⅰ・Ⅱ」

近・現代短歌は「国語Ⅰ」だけに載せる。この教科書では，短歌を扱うのに，「和歌の流れ」として，古典和歌と近・現代短歌とを分けないで，「万葉集」「古今和歌集」「新古今和歌集」などの歌に続けて近・現代短歌を並べている。「愛・その一」に与謝野晶子・近藤芳美・俵万智の短歌を１首ずつ，「愛・その二」に石川啄木・斎藤茂吉・五島美代子の短歌を１首ずつ，「自然」に正岡子規・若山牧水・釈迢空の短歌を１首ずつ，計９首を掲載する。その後に「表現　７」として「短歌を作ろう」という文章を載せているが，この中に俵万智の短歌が２首ある。

戦後の作品としては，近藤芳美・五島美代子の各１首と俵万智の３首，計５首がある。

F　三省堂「国語Ⅰ・Ⅱ」

近・現代短歌は「国語Ⅰ」だけに載せる。「現代文編　二」の「現代の短歌」の章で，近藤芳美・岡井隆・馬場あき子・寺山修司・河野裕子・李正子の６名の短歌を３首ずつ，計18首を掲載する。「現代の短歌」と銘打っているだけあって，すべての短歌が戦後の作品である。

G　三省堂「明解国語Ⅰ・Ⅱ」

「国語Ⅰ」では「現代の文章　二」の「『短歌』を作る」の章で，橘曙覧の「たのしみは」

８首と吉井勇の「寂しければ」９首，計17首を掲載する。橘曙覧の「たのしみは」８首は江戸時代末期の作品で，作られた時期からいえば「近代短歌」とは言えないが，この教科書では内容的な新しさから，「現代の文章」という箇所に入れている。

「国語II」では「髪五尺」の章で，与謝野晶子・島木赤彦・石川啄木・北原白秋・若山牧水・斎藤史・近藤芳美の７名の短歌を２首ずつ，計14首を載せた後に，「死にたまふ母」の題で斎藤茂吉の短歌５首を掲載している。

戦後の作品としては斎藤史・近藤芳美の短歌４首がある。

H　教育出版「国語Ⅰ・II」

「国語Ⅰ」では「５　詠む」の単元に，まず大岡信の「折々のうた」を載せている。ここには斎藤茂吉・寺山修司・俵万智の短歌１首ずつについての鑑賞文が載っている。その後に，「作品」として与謝野晶子・石川啄木・長塚節・釈迢空・近藤芳美の５名の短歌を２首ずつ，計10首を掲載する。

「国語II」では「４　想う」の単元に，斎藤茂吉の「死にたまふ母」の短歌を15首掲載している。　戦後の作品としては，「折々のうた」に引用された寺山修司・俵万智の短歌２首，「作品」の近藤芳美の２首，計４首がある。

I　大修館「高等学校国語Ⅰ・II」

「国語Ⅰ」では「六　短歌と俳句」の単元に，正岡子規・長塚節・与謝野晶子・北原白秋・斎藤茂吉・石川啄木・前田夕暮・会津八一の８名の短歌を２首ずつ，計16首を掲載する。

「国語II」では「六　短歌と俳句」の単元に，伊藤左千夫・島木赤彦・若山牧水・吉井勇・木下利玄・釈迢空・宮柊二・佐藤佐太郎のの８名の短歌を２首ずつ，計16首を掲載する。

戦後の作品としては，「国語Ⅰ」の斎藤茂吉の１首，「国語II」の宮柊二・佐藤佐太郎の４首，計５首がある。

J　大修館「高等学校新国語Ⅰ・II」

「国語Ⅰ」では「八　短歌・俳句」の単元に，「短歌」と題して，長塚節・木下利玄・伊藤左千夫・若山牧水・釈迢空・会津八一・与謝野晶子・北原白秋・前田夕暮・吉野秀雄・正岡子規・斎藤茂吉・近藤芳美・塚本邦雄・寺山修司・岡井隆の16名の短歌を１首ずつ，計16首を掲載し，その後に「東海の　啄木の短歌四首」と題して啄木の短歌を４首掲載している。

「国語II」では「八　短歌・俳句」の単元に，「短歌」と題して，与謝野晶子・長塚節・島木赤彦・若山牧水・北原白秋の５名については２首ずつ計10首，塚本邦雄・岡野弘彦・岡井隆・馬場あき子・寺山修司・佐佐木幸綱・高野公彦・河野裕子の８名については１首ずつ，計８首の短歌，総計18首を掲載し，その後に「死にたまふ母」と題して斎藤茂吉の短歌を５

首掲載している。

戦後の作品としては，「国語Ⅰ」の近藤芳美・塚本邦雄・寺山修司・岡井隆の4首，「国語Ⅱ」の塚本邦雄・岡野弘彦・岡井隆・馬場あき子・寺山修司・佐佐木幸綱・高野公彦・河野裕子の8首，計12首がある。

K　大修館「現代の国語Ⅰ・Ⅱ」

「国語Ⅰ」では「七　短歌・俳句」の単元に，「短歌」と題して，正岡子規・伊藤左千夫・長塚節・島木赤彦・石川啄木・前田夕暮・寺山修司の7名の短歌を2首ずつ，計14首掲載した後に，「麦わら帽子のへこみ」と題して，俵万智の短歌6首を掲載する。

「国語Ⅱ」では「七　短歌・俳句」の単元に，「短歌」と題して，与謝野晶子・若山牧水・北原白秋・会津八一・釈迢空・宮柊二・近藤芳美の7名の短歌を2首ずつ，計14首掲載し，その後に「死にたまふ母」と題して斎藤茂吉の短歌を6首掲載している。

戦後の作品としては，「国語Ⅰ」の寺山修司の2首と俵万智の6首，「国語Ⅱ」の宮柊二・近藤芳美の4首，計10首がある。

L　明治書院「高校生の国語Ⅰ・Ⅱ」

「国語Ⅰ」では「7　短歌と俳句」の単元に，「十五の心」と題して，与謝野晶子・石川啄木・寺山修司・北原白秋・近藤芳美・春日井建・正岡子規・斎藤茂吉・吉野秀雄・島木赤彦・佐佐木信綱・前田夕暮・若山牧水・釈迢空・木俣修の15名の短歌を1首ずつ，計15首掲載する。

「国語Ⅱ」には，「7　短歌と俳句」の単元に，「夏は来ぬ」と題して，吉井勇・前川佐美雄・若山牧水・北原白秋・佐佐木幸綱・中城ふみ子・木下利玄・会津八一・清原日出夫・石川啄木・土岐善麿・宮柊二・斎藤茂吉・窪田空穂・上田三四二の15名の短歌を1首ずつ，計15首掲載する。

戦後の作品としては，「国語Ⅰ」の寺山修司・近藤芳美・春日井建・木俣修の4首，「国語Ⅱ」の前川佐美雄・中城ふみ子・清原日出夫・土岐善麿・宮柊二・上田三四二の6首，計10首がある。

M　明治書院「精選新国語Ⅰ・Ⅱ」

「国語Ⅰ」では「九　短歌と俳句」の単元に，「薔薇の芽」と題して，正岡子規・与謝野晶子・石川啄木・北原白秋・斎藤茂吉の5名の短歌を3首ずつ，計15首を掲載する。

「国語Ⅱ」では「九　短歌と俳句」の単元に，「葛の花」と題して，若山牧水・釈迢空・土屋文明・宮柊二・寺山修司の5名の短歌を3首ずつ，計15首を掲載する。

戦後の作品としては，「国語Ⅰ」の斎藤茂吉の1首，「国語Ⅱ」の釈迢空の1首，土屋文明

の１首，宮柊二・寺山修司のそれぞれ３首，計８首，総計９首がある。

N　右文書院「高等学校新国語Ⅰ」・「高等学校総合国語Ⅱ」

「高等学校新国語Ⅰ」では「六　短歌・俳句」の単元で，「短歌十六首」と題して，与謝野晶子・若山牧水・石川啄木・斎藤茂吉・北原白秋・釈迢空・会津八一・近藤芳美の８名の短歌を２首ずつ，計16首を掲載する。その後で，〔参考〕として，「魅力ある歌と出会う」と題して，馬場あき子が長塚節の「馬追虫(うまおひ)の髭のそよろに来る秋はまなこを閉ぢて思ひみるべし」の歌について書いた鑑賞文を載せている。

教科書の題名に「高等学校新国語Ⅰ」とはあるが，近・現代短歌の教材に関しては，掲載する短歌・脚注・学習の課題・参考にわたって，Ｏの「高等学校国語Ⅰ」とかわりがない。

右文書院の高等学校用の国語教科書は，先にも触れたように，「国語Ⅰ」の教科書は「高等学校新国語Ⅰ」と「高等学校国語Ⅰ」との２種類発行しているが，「国語Ⅱ」の教科書は「高等学校総合国語Ⅱ」の１種類しかなくて，「高等学校新国語Ⅰ」も「高等学校国語Ⅰ」も共にその後は「高等学校総合国語Ⅱ」を使うことになっているので，ここで「高等学校総合国語Ⅱ」について記すと，「七　短歌・俳句」の単元で，「くれなゐの」と題して，正岡子規・佐佐木信綱・伊藤左千夫・島木赤彦・長塚節・木下利玄・土屋文明の７名の短歌を３首ずつ，計21首掲載している。

戦後の作品としては，「国語Ⅰ」の斎藤茂吉の１首，近藤芳美の２首があり，「総合国語Ⅱ」には見当たらない。

O　右文書院「高等学校国語Ⅰ」・「高等学校総合国語Ⅱ」

「高等学校国語Ⅰ」では「八　詩歌」の単元の中で，「短歌十六首」と題して，与謝野晶子・若山牧水・石川啄木・斎藤茂吉・北原白秋・釈迢空・会津八一・近藤芳美の８名の短歌を２首ずつ，計16首を掲載する。その後で，〔参考〕として，「魅力ある歌と出会う」と題して，馬場あき子が長塚節の「馬追虫(うまおひ)の髭のそよろに来る秋はまなこを閉ぢて思ひみるべし」の歌について書いた鑑賞文を載せている。

「高等学校総合国語Ⅱ」については上のＮのところに記したので省略する。

戦後の作品としては，「国語Ⅰ」の斎藤茂吉の１首，近藤芳美の２首があり，「総合国語Ⅱ」には見当たらない。

P　筑摩書房「国語Ⅰ・Ⅱ」

近・現代短歌は「国語Ⅱ」だけに載せる。「現代文〔三〕」の章で，まず，大庭みな子の書いた，「白秋と母」と題する，白秋の童謡や短歌について述べた文章を載せている。この文章には白秋の短歌が４首取り上げられている。その後で，「その子二十」と題して，与謝野晶子・

石川啄木・長塚節・若山牧水・北原白秋・釈迢空・斎藤茂吉・会津八一・近藤芳美・宮柊二・寺山修司の11名の短歌を3首ずつ，計33首を掲載する。

戦後の作品としては，斎藤茂吉の1首，近藤芳美・宮柊二・寺山修司のそれぞれ3首，計10首がある。

Q　筑摩書房「新編国語Ⅰ・Ⅱ」

近・現代短歌は「国語Ⅰ」だけに載せる。「現代文〔二〕」の章で，与謝野晶子・石川啄木・長塚節・若山牧水・北原白秋・釈迢空・斎藤茂吉・会津八一の8名の短歌を3首ずつ，計24首を掲載する。戦後の作品は，斎藤茂吉の1首のみである。

R　角川書店「高等学校国語Ⅰ・Ⅱ」

「国語Ⅰ」では「九　短歌と俳句」の単元に，「いちはつの花」と題して，正岡子規・与謝野晶子・窪田空穂・若山牧水・北原白秋・石川啄木・長塚節・斎藤茂吉・釈迢空・会津八一・斎藤史・土屋文明・宮柊二・近藤芳美・高安国世・岡井隆・塚本邦雄・寺山修司・春日井建・佐佐木幸綱の20名の短歌を1首ずつ，計20首を掲載する。

「国語Ⅱ」では「八　短歌と俳句」の単元に，正岡子規（6首）・与謝野晶子（6首）・石川啄木（3首）・北原白秋（6首）・斎藤茂吉（10首）の計31首を掲載する。

戦後の作品としては，「国語Ⅰ」の斎藤茂吉・斎藤史・土屋文明・宮柊二・近藤芳美・高安国世・岡井隆・塚本邦雄・寺山修司・春日井建・佐佐木幸綱の11首がある。「国語Ⅱ」には見当たらない。

S　旺文社「新国語Ⅰ・Ⅱ」

近・現代短歌は「国語Ⅰ」だけに載せる。〔3〕のⅡの「短歌」の章に，「愛」と題して与謝野晶子・川田順・春日井建・俵万智の短歌を，「青春」と題して石川啄木・寺山修司・道浦母都子の短歌を，「人生」と題して若山牧水・釈迢空・石川不二子の短歌を載せる。このように，10名の短歌を2首ずつ，計20首を掲載する。

戦後の作品としては，春日井建・俵万智・寺山修司・道浦母都子・石川不二子の10首がある。

T　旺文社「高等学校国語Ⅰ・Ⅱ」

近・現代短歌は「国語Ⅰ」だけに載せる。「5　短歌」の単元で，栗木京子の短歌1首について述べた俵万智の文章を載せた後で，「恋」と題して，与謝野晶子・北原白秋・寺山修司・岸上大作の短歌を，「旅・自然」と題して，石川啄木・斎藤茂吉・会津八一・釈迢空・佐藤佐太郎・宮柊二の短歌という具合に，10名の短歌を2首ずつ，計20首，総計21首を掲載する。

戦後の作品としては，栗木京子の１首，寺山修司・岸上大作のそれぞれ２首，斎藤茂吉の１首，佐藤佐太郎・宮柊二のそれぞれ２首，計10首がある。

U　尚学図書「新選国語Ⅰ・Ⅱ」

「国語Ⅰ」では「六　詩歌」の単元に，「近代の短歌」と題して，寺山修司・斎藤茂吉・島木赤彦・石川啄木・若山牧水・与謝野晶子のの６名の短歌を３首ずつ，計18首を掲載する。

「国語Ⅱ」では「六　詩歌」の単元に，「近代の短歌」と題して，宮柊二・五島美代子・釈迢空・木下利玄・北原白秋・長塚節の６名の短歌を３首ずつ，計18首を掲載する。

この教科書は歌人の配列が逆年順になっている。

戦後の作品としては，「国語Ⅰ」の寺山修司の３首，斎藤茂吉の１首，「国語Ⅱ」の宮柊二・五島美代子のそれぞれ３首，計10首がある。

V　尚学図書「標準国語Ⅰ・Ⅱ」

「国語Ⅰ」では「短歌と俳句」の単元に，「近代の短歌」と題して釈迢空・斎藤茂吉・石川啄木・北原白秋の４名の短歌を３首ずつ載せた後，与謝野晶子の歌だけは４首掲載，計16首を載せる。

「国語Ⅱ」では「短歌と俳句」の単元に，「近代の短歌」と題して，窪田章一郎・前田夕暮・木下利玄・土屋文明・島木赤彦の５名の短歌３首ずつ，計15首掲載する。

この教科書は歌人の配列が逆年順になっている。

戦後の作品としては，「国語Ⅰ」の釈迢空・斎藤茂吉のそれぞれ１首，「国語Ⅱ」の窪田章一郎の３首，土屋文明の１首，計６首がある。

W　尚学図書「新国語Ⅰ・Ⅱ」

近・現代短歌は「国語Ⅰ」だけに載せる。「近代の短歌」と題して，寺山修司・釈迢空・斎藤茂吉・石川啄木・若山牧水・北原白秋・与謝野晶子の７名の短歌を２首ずつ，計14首掲載する。

この教科書は歌人の配列が逆年順になっている。

戦後の作品としては，寺山修司の２首と釈迢空の１首，計３首がある。

X　第一学習社「高等学校新編国語Ⅰ・Ⅱ」

近・現代短歌は「国語Ⅰ」だけに載せる。「短歌の世界」の単元に「青春」と題して石川啄木の短歌，「愛」と題して与謝野晶子の短歌，「死」と題して斎藤茂吉の短歌，「旅」と題して若山牧水の短歌，「動物」と題して北原白秋の短歌，「不思議」と題して葛原妙子の短歌を，それぞれ３首ずつ，計18首を掲載している。

戦後の作品は葛原妙子の３首である。

Y　第一学習社「高等学校国語Ⅰ・Ⅱ」

近・現代短歌は「国語Ⅰ」だけに載せる。「短歌」の単元に，「その子二十」と題して，与謝野晶子・石川啄木・若山牧水・島木赤彦・斎藤茂吉・北原白秋の６名の短歌を３首ずつ，計18首を掲載する。

斎藤茂吉の１首は戦後の作品である。

Z　第一学習社「高等学校新訂国語Ⅰ・Ⅱ」

近・現代短歌は「国語Ⅰ」だけに載せる。「短歌」の単元に，「その子二十」と題して，与謝野晶子・石川啄木・若山牧水・島木赤彦・斎藤茂吉・北原白秋の６名の短歌を３首ずつ，計18首を掲載する。教科書の題名に「新訂」とはあるが，この近・現代短歌の単元に関するかぎり，掲載する短歌・脚注・学習の課題にわたって，「高等学校国語Ⅰ」とすべて同じである。

斎藤茂吉の１首は戦後の作品である。

以上，26種類の教科書について，それぞれ近・現代短歌の単元の構成について概観し，歌人別に，収録された短歌の数，その中に第２次世界大戦後に作られた作品が何首あるか，鑑賞文や歌論などを載せている場合はその文章中に扱われている短歌の作者についても調べ，それぞれの教科書の特色について調査した。この調査をもとにして，各教科書がどの歌人の短歌を何首，教材として掲載しているかを示したものが次のページの〔表４〕である。

〔表４〕のように，歌人ごとに短歌の掲載された回数を集計してみた結果，その回数の最も多いのは斎藤茂吉で延べ101回，戦後の作品のみにしぼった三省堂の「国語」には載っていないが，それをのぞいたすべての教科書に教材として採られていることがわかった。それにつづくのが石川啄木（67回），与謝野晶子（66回），北原白秋（58回），若山牧水（47回）といったの歌人で，その中の啄木・晶子は茂吉と同様に戦後の作品のみにしぼった三省堂の「国語」には載っていないが，それをのぞいたすべての教科書に教材として採られている。しかし，茂吉の掲載回数は啄木や晶子と30回以上の差がある。

３種類以上の教科書に作品が掲載された歌人は全体で25名にのぼるが，そのうちで主として戦後に主な作品を発表している歌人を回数の多い順に示すと，寺山修司，近藤芳美・宮柊二・俵万智・岡井隆・馬場あき子・塚本邦雄・佐佐木幸綱・春日井建の９名で，前回（1986年）の調査のときには，近藤芳美・宮柊二の２名にすぎなかったのと比べると，現行の教科書において，戦後の歌人が大幅に進出してきていることがわかる。

表4　各教科書は誰の作品を何首載せているか

記号	発行所名	教科書名 ＼ 歌人名	斎藤茂吉	石川啄木	与謝野晶子	北原白秋	若山牧水	釈迢空	正岡子規	寺山修司	長塚節	島木赤彦	近藤芳美	会津八一	宮柊二	木下利玄	伊藤左千夫	土屋文明	俵万智	吉井勇	前田夕暮	岡井隆	佐佐木信綱	馬場あき子	佐藤佐太郎	塚本邦雄	五島美代子	佐佐木幸綱	春日井建	河野裕子	葛原好子	窪田章一郎	斎藤史	李正子	窪田空穂	川田順	吉野秀雄	道浦母都子	石川不二子	岸上大作	土岐善麿	前川佐美雄	木俣修	高安国世	中城ふみ子	上田三四二	岡野弘彦	清原日出夫	高野公彦	栗木京子	合計
A	日本書籍	新版高校国語Ⅰ・Ⅱ	8	6	5					6																																										25
B	東京書籍	国語Ⅰ・Ⅱ	3	5	3		3		8	3	3	3	3	3	3																																					40
C	東京書籍	新編国語Ⅰ・Ⅱ	1	1	1	2	1	2	2	1	2		1		1							2		2				1																								20
D	学校図書	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	8	2	2	2	2	2	2		2						2		1			1				1																										27
E	学校図書	基礎国語Ⅰ・Ⅱ	1	1	1		1	1	1				1						3								1																									11
F	三省堂	国語Ⅰ・Ⅱ								3			3									3		3						3				3																		18
G	三省堂	明解国語Ⅰ・Ⅱ	5	2	2	2	2					2	2							9													2																		28
H	教育出版	国語Ⅰ・Ⅱ	16	2	2			2		1	2		2						1																																	28
I	大修館	高校生国語Ⅰ・Ⅱ	2	2	2	2	2	2	2		2	2		2	2	2	2			2	2				2																											32
J	大修館	高等学校新国語Ⅰ・Ⅱ	6	4	3	3	3	1	1	2	3	2	1	1		1	1				1	2		1		2		1		1						1										1		1		43
K	大修館	現代の国語Ⅰ・Ⅱ	6	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2		2		6		2																															40
L	明治書院	高校生の国語Ⅰ・Ⅱ	2	2	1	2	2	1	1	1		1	1	1	1	1				1	1		1					1	1						1		1				1	1	1		1	1		1			30
M	明治書院	精選新国語Ⅰ・Ⅱ	3	3	3	3	3	3	3	3					3			3																																		30
N	右文書院	高等学校新国語Ⅰ・総合国語	2	2	2	2	2	2	3		4	3	2	2		3	3	3					3																													38
O	右文書院	高等学校国語Ⅰ・総合国語Ⅱ	2	2	2	2	2	2	3		4	3	2	2		3	3	3					3																													38
P	築摩書房	国語Ⅰ・Ⅱ	3	3	3	7	3	3		3	3		3	3	3																																					37
Q	築摩書房	新編国語Ⅰ・Ⅱ	3	3	3	3	3	3			3			3																																						24
R	角川書店	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	11	4	7	7	1	1	7	1	1		1	1	1			1				1				1		1	1				1		1								1								51
S	旺文社	新国語Ⅰ・Ⅱ		2	2		2	2		2									2										2							2		2	2													20
T	旺文社	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	2	2	2	2		2		2				2	2										2															2											1	21
U	尚学図書	新選国語Ⅰ・Ⅱ	3	3	3	3	3	3		3	3	3			3	3											3																									36
V	尚学図書	標準国語Ⅰ・Ⅱ	3	3	4	3		3				3				3		3			3											3																				31
W	尚学図書	新国語Ⅰ・Ⅱ	2	2	2	2	2	2		2																																										14
X	第一学習社	高等学校新編国語Ⅰ・Ⅱ	3	3	3	3	3																								3																					18
Y	第一学習社	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	3	3	3	3	3					3																																								18
Z	第一学習社	高等学校新訂国語Ⅰ・Ⅱ	3	3	3	3	3					3																																								18
合計			101	67	66	58	48	39	35	35	34	30	24	22	21	16	13	13	13	12	9	9	7	6	4	4	4	4	4	4	3	3	3	3	2	2	2	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	736

次に，こんどは，歌人別に，どの短歌がどの教科書に載せられているかを調べて，その結果を表にしてみると，次の〔表５〕のようになる。この表から，ある短歌がどの教科書に掲載されているかを知ることができると同時に，教科書に延べにして何回とられているかがわかり，その短歌に対するある程度の評価を知ることもできる。

この表における歌人の配列は，短歌が教科書に掲載された延べの回数が多い順とした。掲載された教科書の書名は，270・271ページの〔表１〕の「『国語Ⅰ』・『国語Ⅱ』教科書一覧」の「教科書の略称」の欄に示した漢字２字よりなる略称によって示し，「国語Ⅰ」は１，「国語Ⅱ」は２と示す。

漢字と仮名の使い分け・送り仮名・振り仮名などの短歌の表記に教科書によって違いが見られる場合があるが，この表では「掲載教科書」の欄の最初（いちばん左）に示した教科書の表記に従うことにする。

表５　歌人別掲載短歌一覧表

斎藤茂吉（101回・35首）

番号	短　　歌	掲　載　教　科　書	回数
1	のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳根の母は死にたまふなり	日書2 学図1 三明2 教出2 大新2 大現2 明治2 筑摩2 筑新2 角川2 尚選1 尚標1 尚新1 一新1 第一1 一訂1	16
2	死に近き母に添寝のしんしん遠田のかはづ天に聞こゆる	日書2 学図1 学基1 三明2 教出2 大修1 大新2 大現2 明精1 右新1 右文1 角川2 一新1	13
3	最上川逆白波のたつまでにふぶくゆふべとなりにけるかも	東書2 東新1 教出1 大修1 明精1 筑摩2 筑新1 角川1 旺文1 尚選1 尚標1	11
4	みちのくの母のいのちを一目見ん一目見んとぞただにいそげる	学図1 三明2 教出2 大新2 大現2 角川2	6
5	あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命なりけり	大新1 筑摩2 筑新1 角川2 尚選1 尚新1	6
6	沈黙のわれに見よとぞ百房の黒き葡萄に雨ふりそそぐ	東書2 第一1 一訂1	3
7	我が母よ死にたまひゆく我が母よ我を生まし乳足らひし母よ	学図1 教出2 大現2	3
8	星のゐる夜空のもとに赤赤とははそはの母は燃えゆきにけり	学図1 教出2 大現2	3
9	ひとり来て蚕のへやに立ちたればわが寂しさは極まりにけり	日書2 教出2 角川2	3
10	灰のなかに母をひろへり朝日子ののぼるがなかに母をひろへり	学図1 三明2 教出2	3
11	桑の香の青くただよふ朝明に堪へがたければ母呼びにけり	日書2 学図1 三明2	3
12	母が目をしまし離れ来て目守りたりあな悲しもよ蚕のねむり	日書2 一新1	2
13	この心葬り果てんと秀の光る錐を畳に刺しにけるかも	第一1 一訂1	2
14	かがやけるひとすぢの道遙けくてかうかうと風は吹きゆきにけり	角川2 明精1	2
15	水すまし流にむかひさかのぼる汝がいきほひよ微かなれども	右新1 右文1	2
16	寄り添へる吾を見守りて言ひたまふ何か言ひたまふ我は子なれば	学図1 大現2	2
17	わが母を焼かねばならぬ火を持てり天つ空には見るものもなし	教出2 大新2	2
18	葬り道すかんぽの華ほほけつつ葬り道べに散りにけらずや	日書2 教出2	2

19	死に近き母が目に寄りをだまきの花咲きたりといひにけるかな	日書2	1
20	うらうらと天にひばりは啼きのぼり雪斑らなる山に雲ゐず	日書2	1
21	陸奥をふたわけざまに聳えたまふ蔵王の山の雪の中に立つ	東書2	1
22	吾妻やまに雪かがかやけばみちのくの我が母の国に汽車入りにけり	教出2	1
23	はるばると薬をもちて来しわれを目守りたまへりわれは子なれば	教出2	1
24	春なればひかり流れてうらがなし今は野のべに蟆子も生れしか	教出2	1
25	どくだみも薊の花も焼けゐたり人葬所の天明けぬれば	教出2	1
26	酸の湯に身をすつぽりと浸りゐて空にかがやく光を見たり	教出2	1
27	湯どころに二夜ねぶりて蓴菜を食へばさらさらに悲しみにけり	教出2	1
28	山ゆゑに笹竹の子を食ひにけりははそはの母よははそはの母よ	大新2	1
29	萱ざうの小さき萌を見てをれば胸のあたりがうれしくなりぬ	明治1	1
30	ひた走るわが道暗ししんしんと堪へかねたるわが道くらし	角川2	1
31	いのちある人あつまりて我が母のいのち死行くを見たり死ゆくを	角川2	1
32	あかあかと朝焼けにけりひんがしの山並みの天朝焼けにけり	角川2	1
33	草づたふ朝の蛍よみじかかるわれのいのちを死なしむなゆめ	角川2	1
34	いちめんに唐辛子あかき畑みちに立てる童のまなこ小さし	旺文1	1
35	朝あけて船より鳴れる太笛のこだまはながし並みよろふ山	尚標1	1

石川啄木（67回・28首）

番号	短　　歌	掲　載　教　科　書	回数
1	不来方のお城の草に寝ころびて／空に吸はれし／十五の心	日書1 東書1 教出1 大現1 明治1 明精1 尚標1 一新1	8
2	友がみなわれよりえらく見ゆる日よ／花を買ひ来て／妻としたしむ	三明2 大修1 明治2 右新1 右文1 尚選1 第一1 一訂1	8
3	やはらかに柳あをめる／北上の岸辺目に見ゆ／泣けとごとくに	東新1 教出1 大修1 明精1 筑摩2 筑新1 尚選1 尚標1	8
4	たはむれに母を背負ひて／そのあまり軽きに泣きて／三歩あゆまず	学基1 右新1 右文1 第一1 一訂1	5
5	いのちなき砂のかなしさよ／さらさらと／握れば指のあひだより落つ	学図1 大現1 明精1 角川1	4
6	ふるさとの訛なつかし／停車場の人ごみの中に／そを聴きにゆく	学図1 筑摩2 筑新1 尚新1	4
7	馬鈴薯のうす紫の花に降る／雨を思へり／都の雨に	日書1 東書1 大新1	3
8	しらしらと氷かがやき／千鳥なく／釧路の海の冬の月かな	東書1 筑摩2 筑新1	3
9	ダイナモの／重き唸りのここちよさ／あはれこのごとく物を言はまし	日書1 東書1	2
10	ゆゑもなく海が見たくて／海に来ぬ／心傷みてたへがたき日に	三明2 角川2	2
11	こころよく／我にはたらく仕事あれ／それを仕遂げて死なむと思ふ	尚選1 尚新1	2
12	みぞれ降る／石狩の野の汽車に読みし／ツルゲエネフの物語かな	第一1 一訂1	2
13	頬につたふ／涙のごはず／一握の砂を示しし人を忘れず	日書1	1
14	いたく錆しピストル出でぬ／砂山の／砂を指もて掘りてありしに	日書1	1
15	石をもて追はるるごとく／ふるさとを出でしかなしみ／消ゆる時なし	日書1	1
16	何となく，／今年はよい事あるごとし。／元日の朝，晴れて風無し。	東書1	1
17	東海の小島の磯の白砂に／われ泣きぬれて／蟹とたはむる	大新1	1

18	ふるさとの山に向かひて／言ふことなし／ふるさとの山はありがたきかな	大新1	1
19	新しき明日の来るを信ずといふ／自分の言葉に／嘘はなけれど――	大新1	1
20	秋立つは水にかも似る／洗はれて／思ひことごと新しくなる	角川2	1
21	世の中の明るさのみを吸ふごとき／黒き瞳の／今も目にあり	角川2	1
22	わが恋を／はじめて友にうち明けし夜のことなど／思ひで出づる日	旺新1	1
23	己が名をほのかに呼びて／涙せし／十四の春にかへる術なし	旺新1	1
24	しんとして幅広き街の／秋の夜の／玉蜀黍の焼くるにほひよ	旺文1	1
25	子を負ひて／雪の吹き入る停車場に／われ見送りし妻の眉かな	旺文1	1
26	はたらけど／はたらけどなほわが生活楽にならざり／ぢつと手を見る	尚標1	1
27	怒る時／かならずひとつ鉢を割り／九百九十九割りて死なまし	一新1	1
28	かの時に言ひそびれたる／たいせつの言葉は今も／胸にのこれど	一新1	1

与謝野晶子（66回・20首）

番号	短　　歌	掲　載　教　科　書	回数
1	その子二十櫛にながるる黒髪のおごりの春のうつくしきかな	東書2 東新1 学図1 教出1 大修1 大新1 大現2 明治1 明精1 右新1 右文1 筑摩2 筑新1 角川1 尚標1 尚新1 一新1 第一1 一訂1	19
2	なにとなく君に待たるるここちして出でし花野の夕月夜かな	学図1 学基1 三明1 教出1 大修1 角川2 旺新1 旺文1 尚標1 一新1	10
3	清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき	東書2 大新2 明精1 筑摩2 筑新1 尚選1	6
4	やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君	大新2 角川2 尚選1 一新1 第一1 一訂1	6
5	鎌倉や御仏なれど釈迦牟尼は美男におはす夏木立かな	大現2 第一1 一訂1	3
6	金色のちひさき鳥のかたちして銀杏ちるなり夕日の岡に	右新1 右文1 尚新1	3
7	海恋し潮の遠鳴りかぞへては少女となりし父母の家	筑摩2 筑新1 尚標1	3
8	ああ皐月仏蘭西の野は火の色す君も雛罌粟われも雛罌粟	日書2 明精1	2
9	髪五尺ときなば水にやはらかき少女ごころは秘めて放たじ	三明2 旺新1	2
10	くろ髪の千すぢの髪のみだれ髪かつおもひみだれおもひみだるる	角川2 旺文1	2
11	おのれこそ旅ごころすれ一人居る昼のはかなさ夜のあぢきなさ	日書2	1
12	わが男ひとへにたのむ哀れさのこの頃となりあからさまなる	日書2	1
13	三千里わが恋人のかたはらに柳の絮の散る日に来る	日書2	1
14	四つ辻の薔薇を積みたる車よりよき香ちるなり初夏の雨	日書2	1
15	ほととぎす治承寿永のおん国母三十にして経よます寺	東書2	1
16	ほととぎす嵯峨へは一里京へ三里水の清滝夜の明けやすき	角川2	1
17	ふるさとの潮の遠音のわが胸にひびくをおぼゆ初夏の雲	角川2	1
18	たたかひは見じと目とづる白塔に西日しぐれぬ人死ぬ夕べ	角川2	1
19	夏のかぜ山よりきたり三百の牧の若馬耳ふかれけり	尚選1	1
20	押へたる赤きとんぼの羽ばたきぬ恋かと思ふ手ざはりをして	尚標1	1

北原白秋（58回・28首）

番号	短　　歌	掲載教科書	回数
1	春の鳥な泣きそ泣きそあかあかと外の面の草に日の入る夕べ	学図1 三明2 大修1 大新2 大現2 明精1 右新1 右文1 筑摩2 筑新1 尚選2 尚標1 一新1	13
2	昼ながら幽かに光る蛍一つ孟宗の藪を出でて消えたり	三明2 明精1 尚選2 尚標1 一新1 第一1 一訂1	7
3	ヒヤシンス薄紫に咲きにけりはじめて心顫ひそめし日	東新2 学図1 明治1 旺文1	4
4	かくまでに黒きかなしき色やあるとわが思ふひとの春のまなざし	大新1 大現2 明治2 旺文1	4
5	朴の花白くむらがる夜明がたひむがしの空に雷はとどろく	右新1 右文1	2
6	しみじみと物のあはれを知るほどの少女となりし君とわかれぬ	筑摩2 筑新1	2
7	いつしかに春の名残となりにけり昆布干し場のたんぽぽの花	筑摩2 筑新1	2
8	病める児はハモニカを吹き夜に入りぬもろこし畑の黄なる月の出	角川1 一訂1	2
9	君かへす朝の鋪石さくさくと雪よ林檎の香のごとくふれ	第一1 一訂1	2
10	照る月の冷さだかなるあかり戸に眼は凝らしつつ盲ひてゆくなり	第一1 一訂1	2
11	すずろかにクラリネットの鳴りやまぬ日の夕ぐれとなりにけるかな	東新2	1
12	冬冷き皿の上には山鳥の瞼しろし閉ぢしまなぶた	筑摩2	1
13	そことなき春の蚊すらに聴くものは愛しかりけり若葉たをやぐ	筑摩2	1
14	か黝葉にしづみて匂ふ夏霞若かる我は見つつ観ざりき	筑摩2	1
15	黒き檜の沈静にして現しけき花をさまりて後にこそ観め	筑摩2	1
16	手にとれば桐の反射の薄青き新聞紙こそ泣かまほしけれ	大修1	1
17	指さきのあるかなきかの青き傷それにも夏は染みて光りぬ	大新2	1
18	この山はたださうさうと音すなり松に松の風椎に椎の風	明精1	1
19	ゆふぐれのとりあつめたるもやのうちしづかにひとのなくねきこゆる	角川2	1
20	廃れたる園に踏み入りたんぽぽの白きを踏めば春たけにける	角川2	1
21	松の葉の松の木の間をちりきたるそのごとほそきかなしみの来る	角川2	1
22	かはたれの白き露台に出でて見つわがおもふ人はいづち去にけむ	角川2	1
23	ひとをどりひやるろと吹けば笛の音ひやるろふれうと鳴るがいとしさ	角川2	1
24	時計の針1と1とに来るときするどく君をおもひつめにき	角川2	1
25	碓氷嶺の南おもてとなりにけりくだりつつ思ふ春のふかきを	尚標1	1
26	草わかば色鉛筆の赤き粉のちるがいとしく寝て削るなり	尚新1	1
27	ひたしやぎり月に吹く子が横笛は口もて吹かず腰ゆすり吹く	尚新1	1
28	飛びあがり宙にためらふ雀の子羽たたきて見居りその揺るる枝を	一新1	1

若山牧水（47回・10首）

番号	短　　歌	掲載教科書	回数
1	白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ	東新1 学図2 学基1 三明2 大修2 大新2 大現2 明治2 明精2 右新1 右文1 筑摩2 筑新1 角川1 尚選1 尚新1 第一1 一訂1	18

2	幾山河越えさりゆかば寂しさの終てなむ国ぞ今日も旅ゆく	学図2 大修2 大新1 大現2 明治1 明精2 右新1 右文1 筑摩2 筑新1 旺新1 尚選1 尚新1 一新1 第一1 一訂1	16
3	吾木香すすきかるかや秋くさのさびしききはみ君におくらむ	東書2 三明2	2
4	春白昼ここの港に寄りもせず岬を過ぎて行く船のあり	東書2 大現2	2
5	海底に眼のなき魚の棲むといふ眼の無き魚の恋しかりけり	東書2 大新2	2
6	瀬々走るやまめうぐひのうろくづの美しき春の山ざくら花	明精2 尚選1	2
7	いざ行かむ行きてまだ見ぬ山を見むこのさびしさに君は耐ふるや	筑摩2 筑新1	2
8	山に来てほのかにおもふたそがれの街にのこせしわが靴の音	旺新1	1
9	けふもまたこころの鉦をうち鳴しうち鳴しつつあくがれて行く	一新1	1
10	旅人のからだもいつか海となり五月の雨が降るよ港に	一新1	1

釈迢空（39回・11首）

番号	短　　歌	掲　載　教　科　書	回数
1	葛の花　踏みしだかれて，色あたらし。この山道を行きし人あり	東新2 学基1 教出1 大修2 大現2 明治1 明精2 右新1 右文1 筑摩2 筑新1 旺文1 尚選2 尚標1 尚新1	15
2	邑山の松の木むらに，日はあたり　ひそけきかもよ。旅人の墓	大新1 筑摩2 筑新1 旺文1 尚標1	5
3	人も馬も道ゆきつかれ死ににけり。旅寝かさなるほどの　かそけさ	教出1 明精2 右新1 右文1 旺新1	5
4	たたかひに果てにし子ゆゑ，身に沁みて　ことしの桜　あはれ　散りゆく	学図2 大修2 大現2 明精2	4
5	桜の花ちりぢりにしも／わかれ行く　遠きひとり／と　君もなりなむ	筑摩2 筑新1 尚選2	3
6	萱山に　炭竈ひとつ残り居て，この宿主は，戦ひに死す	尚標1 尚新1	2
7	はろばろに澄みゆく空か。裾ながく　海より出づる鳥海の山	東新2	1
8	谷々に，家居ちりぼひ　ひそけさよ。山の木の間に息づく。われは	学図1	1
9	目のまへに，ゆるる一木のまだ見えて，このゆふぐれの　山のしづけさ	角川1	1
10	道とほく行き細りつつ　音もなし―。日の照る山に時専ら過ぐ	旺新1	1
11	気多の村／若葉くろずむ時に来て，／遠海原の　音を／聴きをり	尚選2	1

正岡子規（35回・15首）

番号	短　　歌	掲　載　教　科　書	回数
1	くれなゐの二尺のびたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる	東書2 学図1 学基1 大修1 大現1 明精1 右総2 右総2	8
2	いちはつの花咲きいでて我目には今年ばかりの春ゆかんとす	東書1 東新2 学図1 大修1 大現1 角川1	6
3	瓶にさす藤の花ぶさみじかければたたみの上にとどかざりけり	東書2 明精1 右総2 右総2 角川2	5
4	夕顔の棚つくらんと思へども秋まちがてぬ我いのちかも	東書1 大新1 明治1	3
5	いたづきの癒ゆる日知らにさ庭べに秋草花の種を蒔かしむ	東書1 東新2	2
6	松の葉の葉毎に結ぶ白露の置きてはこぼれこぼれては置く	右総2 右総2	2
7	若松の芽だちの緑長き日を夕かたまけて熱出でにけり	東書2	1

8	夜の床に寝ながら見ゆるガラス戸の外あきらかに月ふけわたる	東書1	1
9	脚たたば不尽の高嶺のいただきをいかづちなして踏みならさましを	東書1	1
10	神鳴のわづかに鳴れば唐茄子の臍とられじと葉隠れて居り	明精1	1
11	瓶にさす藤の花ぶさ一ふさはかさねし書の上に垂れたり	角川2	1
12	藤なみの花をし見れば奈良のみかど京のみかどの昔こひしも	角川2	1
13	藤なみの花をし見れば紫の絵の具取り出で写さんと思ふ	角川2	1
14	藤なみの花の紫絵にかかばこき紫にかくべかりけり	角川2	1
15	瓶にさす藤の花ぶさ花垂れて病の牀に春暮れんとす	角川2	1

寺山修二（35回・21首）

番号	短　　歌	掲　載　教　科　書	回数
1	マッチ擦るつかのま海に霧探し身捨つるほどの祖国はありや	日書1 東書2 三省1 教出1 大新1 大現1 明精2 筑摩2 旺新1 尚選1	10
2	一粒の向日葵の種まきしのみに荒野をわれの処女地と呼びき	大現1 尚選1 尚新1	3
3	吊るされて玉葱芽ぐむ納屋ふかくツルゲエネフをはじめて読みき	三省1 明精2	2
4	森駆けてきてほてりたるわが頬をうずめむとするに紫陽花くらし	日書1 尚新1	2
5	ラグビーの頬傷は野で癒ゆるべし自由をすでに怖じぬわれらに	日書1 明治1	2
6	果樹園のなかに明日あり木柵に胸いたきまで押しつけて画く	日書1	1
7	わが夏をあこがれのみが駈け去れり麦藁帽子被りて眠る	日書1	1
8	わが撃ちし鳥は拾わで帰るなりもはや飛ばざるものは妬まぬ	日書1	1
9	寝にもどるのみのわが部屋生くる蠅つけて蠅取紙ぶらさがる	東書2	1
10	すでに亡き父への葉書一枚もち冬田を越えて来し郵便夫	東書2	1
11	さむきわが望遠鏡がとらえたる蔦遠ければかすかなる飢え	東新1	1
12	駈けて来てふいにとまればわれをこえてゆく風たちの時を呼ぶこえ	三省1	1
13	海を知らぬ少女を前に麦藁帽のわれは両手をひろげていたり	大新2	1
14	ふるさとの訛りなくせし友といてモカ珈琲はかくまでにがし	明精2	1
15	大工町寺町米寺仏町老母買ふ町あらずやつばめよ	筑摩2	1
16	売りにゆく柱時計がふいに鳴る横抱きにして枯野ゆくとき	筑摩2	1
17	大いなる欅にわれは質問す空のもつとも青からむ場所	角川1	1
18	見るために両 瞼をふかく裂かむとす剃刀の刃に地平をうつし	旺新1	1
19	草の笛吹くを切なく聞きており告白以前の愛とは何ぞ	旺文1	1
20	太陽のなかに蒔きゆく種子のごとくしずかにわれら頬燃ゆるとき	旺文1	1
21	かくれんぼの鬼とかれざるまま老いて誰をさがしにくる村祭り	尚選1	1

長塚節（34回・9首）

番号	短　　歌	掲　載　教　科　書	回数
1	馬追虫の髭のそよろに来る秋はまなこを閉ぢて想ひ見るべし	東新2 学図1 教出1 大修1 大新1 大現1 右新1 右文1 右総2 石総2 筑摩2 筑新1 尚選2	13

2	白埴の瓶こそよけれ霧ながら朝はつめたき水くみにけり	学図1 大修1 大現1 角川1 尚選2	5
3	垂乳根の母が釣りたる青蚊帳をすがしといねつたるみたれども	東書2 大新2 右総2 右総2 尚選2	5
4	白銀の鍼打つごときぎりぎりす幾夜をへなば涼しかるらむ	東書2 筑摩2 筑新1	3
5	芋の葉にこぼるる玉のこぼれこぼれ子芋は白く凝りつつあらむ	東書2 教出1	2
6	鵙の声徹りて響く秋の空にとがりて白き乗鞍を見し	右総2 右総2	2
7	楢の木の嫩葉は白しやはらかに単衣の肌に日は透りたり	筑摩2 筑新1	2
8	小夜深に咲きて散るとふ稗草のひそやかにして秋さりぬらむ	東新2	1
9	鶏頭は冷たき秋の日にはえていよいよ赤く冴えにけるかも	大新2	1

島木赤彦（30回・9首）

番号	短　　歌	掲　載　教　科　書	回数
1	隣室に書よむ子らの声きけば心に沁みて生きたかりけり	三明2 大修2 大現1 尚選1 尚標2 第一1 一訂1	7
2	みづうみの氷は解けてなほ寒し三日月の影波にうつろふ	東書2 大新2 右総2 右総2 第一1 尚選1 一訂1	7
3	夕焼空焦げきはまれる下にして氷らんとする湖の静けさ	三明2 大修2 大現1 明治1 尚標2	5
4	信濃路はいつ春にならん夕づく日入りてしまらく黄なる空の色	東書2 右総2 右総2	3
5	高槻のこずゑにありて頬白のさへづる春となりにけるかも	大新2 尚標2	2
6	椿の蔭をんな音なく来りけり白き布団を乾しにけるかも	右総2 右総2	2
7	ひたぶるに我を見たまふみ顔より涎を垂らしたまふ尊さ	第一1 一訂1	2
8	我が家の犬はいづこにゆきぬらむ今宵も思ひ出でて眠れる	東書2	1
9	むらぎもの心しづまりて聞くものかわれの子どもの息終わるおとを	尚選1	1

近藤芳美（24回・14首）

番号	短　　歌	掲　載　教　科　書	回数
1	たちまちに君が姿を霧とざし或る楽章をわれは思ひき	東書2 学基1 三省1 教出1 大現2 明治1 筑摩2	7
2	傍観を良心として生きし日々青春と呼ぶときもなかりき	三明2 大現2	2
3	世をあげて思想の中にまもり来て今こそ戦争を憎む心よ	三明2 角川1	2
4	壊れたる柵を入り来て清き雪靴下ぬれて汝は従ふ	右新1 右文1	2
5	生きてゆく楽しと歌ひ去りながら幕下りたれば湧く涙かも	右新1 右文1	2
6	手を垂れてキスを待ち居し表情の幼きを恋ひ別れ来りぬ	東書2	1
7	絶えずして人らささやき合ふ如き長き戦ひの日に生きて来ぬ	東書2	1
8	裾ひろくクローバの上に坐り居る汝を白じらと残して昏るる	東新1	1
9	戦争の事想ふとき突き放すまなこと言へり吾のまなこを	三省1	1
10	すでに吾にしらぬふるさと原爆碑見て去りこがらしの橋渡りつつ	三省1	1
11	果てしなき彼方に向かひて手旗うつ万葉集をうち止まぬかも	教出1	1
12	白き虚空とどまり白き原子雲そのまぼろしにつづく死の町	大新1	1
13	果物皿かがげふたたび入り来たる靴下はかぬ脚稚けれ	筑摩2	1

14	漠然と恐怖の彼方にあるものは或いは素直に未来とも言ふ	筑摩2	1

会津八一（22回・10首）

番号	短　歌	掲載教科書	回数
1	おほてら の まろき はしら の つきかげ を つち に ふみつつ もの を こそ おもへ	東書2 大修1 大新1 筑摩2 筑新1	5
2	すいえん の あま つ をとめ が ころもで の ひま にも すめる あき の そら かな	大修1 大現2 右新1 右文1	4
3	あめつち に われ ひとり ゐて たつ ごとき この さびしさ を きみ は ほほゑむ	東書2 大現2 右新1 右文1	4
4	ならさか の いし の ほとけ の おとがひ に こさめ ながるる はる は き に けり	筑摩2 筑新1	2
5	すべ も なく やぶれし くに の なかぞら を わたらふ かぜ の おと ぞ かなしき	筑摩2 筑新1	2
6	くわんおん の しろき ひたひ に やうらく の かげ うごかして かぜ わたる みゆ	東書2	1
7	かすがのにおしてるつきのほがらかにあきのゆふべとなりにけるかも	明治2	1
8	くさにねてあふげばのきのあをぞらにすずめかつとぶやくしじのたふ	角川1	1
9	はつなつのかぜとなりぬとみほとけはをゆびのうれにほのしらすらし	旺文1	1
10	いかるがのさとのをとめはよもすがらきぬはたおれりあきちかみかも	旺文1	1

宮柊二（21回・15首）

番号	短　歌	掲載教科書	回数
1	あたらしく冬きたりけり鞭のごと幹ひびき合ひ竹群はあり	東書2 大修2 大現2 明精2 筑摩2	5
2	七階に空ゆく雁のこゑきこえこころしづまる吾が生あはれ	東書2 明治2	2
3	怺へたるをさな子の顔ひきしまり叱る母をば喰ひ入るごと見入る	東新1 尚選2	2
4	むらさきの通草の花の散る谷に山鳩のこゑ二つきこゆる	東書2	1
5	たたかひを終はりたる身を遊ばせて石群がれる谷川を越ゆ	大修2	1
6	群鶏の数を離れて風中に一羽立つ鶏の眼ぞ澄める	大現2	1
7	おそらくは知らるるなけむ一兵に生きの有様をまつぶさに遂げむ	明精2	1
8	思想とは生活の謂たとふれば批評のごとき間接をせず	明精2	1
9	日蔭より日の照る方に群鶏の数多き脚歩みてゆくも	筑魔2	1
10	麻の葉に夜の雨降る山西の山ふかき村君が死にし村	筑魔2	1
11	数知れぬ弾丸をし裏む空間が火を呼ぶごとくひきしまり来つ	角川1	1
12	河原来て一人踏み立つ午どきの風落ちしかば砂のしづまり	旺文1	1
13	ころぶして銃抱えたるわが影の黄河の岸の一人の兵の影	旺文1	1
14	つき放れし貨車が夕光に走りつつ寂しきまでにとどまらずけり	尚選2	1
15	蠟燭の長き炎のかがやきて揺れたるごとき若き代過ぎぬ	尚選2	1

高等学校教科書「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」における近・現代短歌教材

木下利玄（16回・5首）

番号	短　　歌	掲　載　教　科　書	回数
1	牡丹花は咲き定まりて静かなり花の占めたる位置の確かさ	大修2 明治2 右総2 右総2 尚選2 尚標2	6
2	曼珠沙華一むら燃えて秋陽つよしそこ過ぎてゐるしづかなる径	右総2 右総2 尚選2 尚標2	4
3	街をゆき子供の傍を通る時蜜柑の香せり冬がまた来る	大修2 右総2 右総2	3
4	夕方に子供の遊ぶころとなり街にも下る蒼きうす靄	尚選2 尚標2	2
5	曼珠沙華咲く野の日暮れは何かなしに狐が出るとおもふ大人の今も	大新1	1

伊藤左千夫（13回・4首）

番号	短　　歌	掲　載　教　科　書	回数
1	おり立ちて今朝の寒さを驚きぬ露しとしとと柿の落ち葉深く	学図1 大修2 大現1 右総2 右総2	5
2	牛飼ひが歌咏む時に世の中のあらたしき歌大いに起こる	大修2 大現1 右総2 右総2	4
3	高山も低山もなき地の果は見る目の前に天し垂れたり	学図1 大新1	2
4	天地の四方の寄合を垣にせる九十九里の浜に玉拾ひ居り	右総2 右総2	2

土屋文明（13回・9首）

番号	短　　歌	掲　載　教　科　書	回数
1	夕べ食すほうれん草は茎立てり淋しさを遠くつげてやらまし	尚標2 右総2 右総2	3
2	この三朝あさなあさなをよそほひし睡蓮の花今朝はひらかず	右総2 右総2	2
3	ふるさとの盆も今夜はすみぬらむあはれ様々に人は過ぎにし	右総2 右総2	2
4	一生の喜びに中学に入りし日よその時の靴屋あり吾は立ち止る	尚標2	1
5	山も川もうつるといへど言葉あり千年を結ぶ言葉をぞ思ふ	尚標2	1
6	オルドスを来りし駱駝荷をおろし一つ箱舟の渡す時待つ	角川1	1
7	ただひとり吾より貧しき友なりき金のことにて交　絶てり	明精2	1
8	その石に君もしばらく坐りたまへその小さきは蕗の若萌	明精2	1
9	個の力及ばぬ歴史おそれつつ少しよきくらしを新年に待つ	明精2	1

俵万智（13回・10首）

番号	短　　歌	掲　載　教　科　書	回数
1	「寒いね」と話しかければ「寒いね」と答える人のいるあたたかさ	学基1 大現1 旺新1	3
2	「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日	学基1 大現1	2
3	たっぷりと君に抱かれているようなグリンのセーター着て冬になる	学基1	1
4	陽のあたる壁にもたれて座りおり平行線の吾と君の足	学図1	1
5	白菜が赤帯しめて店先にうっふんうっふん肩を並べる	教出1	1
6	思い出の一つのようでそのままにしておく麦わら帽子のへこみ	大現1	1

7	四万十に光の粒をまきながら川面をなでる風の手のひら	大現1	1
8	何もかも考えこんでいるような五月，裾濃のオレンジジュース	大現1	1
9	生み終えし後の清しさ林檎樹は両手を広げ雪を迎える	大現1	1
10	また電話しろよと言って受話器置く君に今すぐ電話をしたい	旺新1	1

吉井勇（12回・11首）

番号	短　　歌	掲　載　教　科　書	回数
1	夏は来ぬ相模の海の南風にわが瞳燃ゆわがこころ燃ゆ	大修2 明治2	2
2	寂しければ人にはあらぬ雲にさへしたしむ心しばしわきたり	三明1	1
3	寂しければ死にたる友のたれかれのことを思ひて目裏熱しも	三明1	1
4	寂しければ自棄のすがたに振る舞へどやがて恥づらくおのが弱きを	三明1	1
5	寂しければ寂しきままに生きてゐむひとり飯食しひとりもの書き	三明1	1
6	寂しければ昨日をおもひ今日をおもひ明日をおもひぬうつらうつらに	三明1	1
7	寂しければ冬なほ生きてある虫の命かなしと思はざらめや	三明1	1
8	寂しければこころ弱くもなりにけむ空見てあるに涙落ちたり	三明1	1
9	寂しければ人をしのばむよすがにと竹花籠に寒菊を挿す	三明1	1
10	寂しければ夜のつれづれに取う出たる味噌煎餅のしめりわびしも	三明1	1
11	かにかくに祇園はこひし寐るときも枕の下を水のながるる	大修2	1

前田夕暮（9回・5首）

番号	短　　歌	掲　載　教　科　書	回数
1	向日葵は金の油を身にあびてゆらりと高し日のちささよ	大修1 明治1 尚標2	3
2	木に花咲き君わが妻とならむ日の四月なかなか遠くもあるかな	大修1 大新1 大現1	3
3	自然がずんずん体のなかを通過する——山，山，山	大現1	1
4	雪のうへに空がうつりてうす青しわがかなしみぞしづかに燃ゆなる	尚標2	1
5	洪水川あからにごりてながれたり地より虹の湧き立ちにけり	尚標2	1

岡井隆（9回・9首）

番号	短　　歌	掲　載　教　科　書	回数
1	あわあわと今湧いている感情をただ愛とのみ言い切るべしや	東新2	1
2	詩歌などもはや救抜につながらぬからき地上をひとり行くわれは	東新2	1
3	眠られぬ母のためわが誦む童話母の寝入りし後王子死す	学図1	1
4	啼きそろふ喬き熊蟬　彼らさへ戦後をともにせしものの裔	三省1	1
5	おびただしき無言の if におびえては春寒の夜の過ぎむとすらむ	三省1	1
6	弦と指とたたかふごとき終曲はたとふれば今日午後のわが生	三省1	1
7	ゆっくりと浮力をつけてゆく凧に龍の字が見ゆ字は生きて見ゆ	大新1	1

8	つややかに思想に向きて開ききるまだおさなくて燃え易(やす)き耳	大新2	1
9	眠らざりける暁に少年のあわれ夥(おびただ)しき仮説を下(くだ)痢す	角川1	1

佐佐木信綱（7回・3首）

番号	短　　歌	掲載教科書	回数
1	ゆく秋の大和の国の薬師寺の塔の上なる一ひらの雲	明治1 右総2 右総2	3
2	大門(だいもん)のいしずゑの苔(こけ)にうづもれて七堂伽藍(しちだうがらん)ただ秋の風	右総2 右総2	2
3	山の上に立てりて久し吾(われ)もまた一本(いっぽん)の木の心地するかも	右総2 右総2	2

馬場あき子（6回・6首）

番号	短　　歌	掲載教科書	回数
1	足裏を舞によごしし足袋ひとつ包みてわれのまぼろしも消す	東新2	1
2	くれなゐを冬の力として堪えし寒椿(かんつばき)みな花をはりたり	東新2	1
3	花散りて実をもつ前の木は暗し目つぶれば天にとどく闇(やみ)ある	三省2	1
4	古雛(ふるびな)の目もとかそけくなりてはててみちのく遅き春をみてをり	三省2	1
5	情熱は言葉ならねどさびしさに言葉なすかな人と出会ひて	三省2	1
6	むくむくと春の綿雲ふえてゆき桃咲き梅散り椿(つばき)狂へり	大新2	1

佐藤佐太郎（4回・4首）

番号	短　　歌	掲載教科書	回数
1	薄明のわが意識にてきこえくる青杉(あをすぎ)を焚(た)く音とおもひき	大修2	1
2	階くだり来る人ありてひとところ踊り場にさす月に顕(あら)はる	大修2	1
3	今しばし麦うごかしてゐる風を追憶を吹く風とおもひし	旺文1	1
4	高きより光をのべて落つる瀧(たき)音さやさやと騒がしからず	旺文1	1

塚本邦雄（4回・4首）

番号	短　　歌	掲載教科書	回数
1	少女死するまで炎天の縄跳びのみづからの円駆けぬけられぬ	学図1	1
2	日本脱出したし　皇帝ペンギンも皇帝ペンギン飼育係りも	大新1	1
3	馬を洗はば馬のたましひ冴(さ)ゆるまで人恋はばひとあやむるこころ	大新2	1
4	青年の群(むれ)に少女らまじりゆき烈風のなかの撓(たわ)める硝子(ガラス)	角川1	1

五島美代子（4回・4首）

番号	短　歌	掲載教科書	回数
1	あけて待つ子の口のなかやはらかし粥運ぶわが匙に触れつつ	学基1	1
2	わが息と共に呼吸する子と知らずに亡きを悼みて人の言ふかも	尚選2	1
3	目さむればいのちありけり露ふふむ朝山ざくら額にふれゐて	尚選2	1
4	亡き子来て袖ひるがへしこぐとおもふ月白き夜の庭のブランコ	尚選2	1

佐佐木幸綱（4回・4首）

番号	短　歌	掲載教科書	回数
1	水を蹴って真逆さまに潜りゆく逆しまのわれ未練のこすな	東新1	1
2	ジャージの汗滲むボール横抱きに吾駆けぬけよ吾の男よ	大新2	1
3	なめらかな肌だったっけ若草の妻ときめてたかもしれぬ掌は	明治2	1
4	俺は帰るぞ俺の明日へ　黄金の疲れに眠る友よおやすみ	角川1	1

春日井建（4回・4首）

番号	短　歌	掲載教科書	回数
1	火の剣のごとき夕陽に跳躍の青年一瞬血ぬられて飛ぶ	角川1	1
2	海鳴りのごとく愛すと書きしかばこころに描く怒濤は赤き	明治1	1
3	学友の語れる恋は皆淡し遠く春雷の鳴る空のした	旺新1	1
4	澄む眼して君も雑踏を歩みゐむ泉水をめぐり別れしふたり	旺新1	1

河野裕子（4回・4首）

番号	短　歌	掲載教科書	回数
1	少女期終らんとしてうぶ毛濃き顔うちつけの西日にさらすかな	三省1	1
2	夏帽子すこしななめにかぶりゐてうつ向くときに眉は長かり	三省1	1
3	窓のやうな眸持つ少女だった　のぞけばしんと海が展けて	三省1	1
4	荒あらと肩をつかみてひき戻すかかる暴力を愛せり今も	大新2	1

葛原妙子（3回・3首）

番号	短　歌	掲載教科書	回数
1	水中より一尾の魚跳ねいでてたちまち水のおもて合はざりき	一新1	1
2	膨れたる壺に差したる一輪の椿よりあまたの椿湧くべし	一新1	1
3	他界より眺めてあらばしづかなる的となるべきゆふぐれの水	一新1	1

高等学校教科書「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」における近・現代短歌教材

窪田章一郎（3回・3首）

番号	短　　歌	掲載教科書	回数
1	ちかぢかと夜空の雲にこもりたる巷のひびき春ならむとす	尚標2	1
2	灯を消して寝に就く子らに声をかくわれも父よりされしごとくに	尚標2	1
3	猫じゃらし昼顔の花かやつり草佇み見けむ唐土の空海	尚標2	1

斎藤史（3回・3首）

番号	短　　歌	掲載教科書	回数
1	しなやかな若いけものを馭しゆけり蹄にかかり花は散るもの	三明2	1
2	がらす瓶の藻にさへ春は透きとほりかくれ棲むべき物陰もなし	三明2	1
3	白きうさぎ雪の山より出でて来て殺されたれば眼を開き居り	角川1	1

李正子（3回・3首）

番号	短　　歌	掲載教科書	回数
1	ときあかすために掛け継ぐ夜の電話孤独は自らの声に漂う	三省1	1
2	われはわれにてなお何ならむ焦がるれば夜の稲妻膝照らすなり	三省1	1
3	まさやかに星は息づき夏深むわれはかなわぬものを選びし	三省1	1

窪田空穂（2回・2首）

番号	短　　歌	掲載教科書	回数
1	其の子等に捕らへられんと母が魂蛍と成りて夜を来たるらし	明治2	1
2	鉦鳴らし信濃の国を行き行かばありしながらの母見るらむか	角川1	1

川田順（2回・2首）

番号	短　　歌	掲載教科書	回数
1	十七の春のわかれや惜しからぬ花の吹雪に笑みて佇つ君	旺新1	1
2	君追ひて迷ひ入りぬるまぼろしの森うつくしきしら藤の花	旺新1	1

吉野秀雄（2回・2首）

番号	短　　歌	掲載教科書	回数
1	病む妻の足頸にぎり昼寝する末の子を見れば死なしめがたし	大新1	1
2	わがやまひ癒ゆる日おもふ春さりてあかとき高き潮騒の音	明治1	1

道浦母都子（2回・2首）

番号	短　　歌	掲　載　教　科　書	回数
1	あきらめしわが青春の逝く春をみおつくしの鐘鳴る街に病む	旺新1	1
2	研(と)ぎてゆくわれの言葉もわが魂(たま)もなべて己(おの)れに向きて尖(とが)れり	旺新1	1

石川不二子（2回・2首）

番号	短　　歌	掲　載　教　科　書	回数
1	何かまた見失ひたる心地して歩めばとほき雪が舞ひくる	旺新1	1
2	コスモスの花びら雨にすきとほりひもじき山羊(やぎ)とわが立ちつくす	旺新1	1

岸上大作（2回・2首）

番号	短　　歌	掲　載　教　科　書	回数
1	美しき誤算のひとつわれのみが昂(たか)ぶりて逢(あ)い重ねしことも	旺文1	1
2	裸木深くナイフ刺したり失いしひとつの言葉埋(うず)めんとして	旺文1	1

土岐善麿（1回・1首）

番号	短　　歌	掲　載　教　科　書	回数
1	爆音は星空高く消えゆきぬ世界よまたも迷ふことなかれ	明治2	1

前川佐美雄（1回・1首）

番号	短　　歌	掲　載　教　科　書	回数
1	春の夜にわが思ふなりわかき日のからくれなゐや悲しかりける	明治2	1

木俣修（1回・1首）

番号	短　　歌	掲　載　教　科　書	回数
1	日は落ちぬ玉蜀黍(もろこし)畑の道杏(とほ)く幌馬車(ほろばしゃ)ひとつ急ぎゆく見ゆ	明治1	1

高安国世（1回・1首）

番号	短　　歌	掲　載　教　科　書	回数
1	何の旋律か思ひ出されず裸木の林の奥に日が落ちてゆく	角川1	1

中城ふみ子（1回・1首）

番号	短　　歌	掲　載　教　科　書	回数
1	春のめだか雛(ひな)の足あと山椒(さんせう)の実それらのものの一つかわが子	明治2	1

上田三四二（1回・1首）

番号	短　　歌	掲　載　教　科　書	回数
1	死はそこに抗(あらが)ひがたく立つゆゑに生きてゐる一日(ひとひ)一日はいづみ	明治2	1

岡野弘彦（1回・1首）

番号	短　　歌	掲　載　教　科　書	回数
1	うなじ清き少女ときたり仰ぐなり阿修羅(あしゆら)の像の若きまなざし	大新2	1

清原日出男（1回・1首）

番号	短　　歌	掲　載　教　科　書	回数
1	それぞれは秀でて天を目指すとも寄り合うたしかに森なる世界	明治2	1

高野公彦（1回・1首）

番号	短　　歌	掲　載　教　科　書	回数
1	青春はみづきの下をかよふ風あるいは遠い線路のかがやき	大新2	1

栗本京子（1回・1首）

番号	短　　歌	掲　載　教　科　書	回数
1	観覧車回れよ回れ想(おも)ひでは君には一日(ひとひ)我には一生(ひとよ)	旺文1	1

以上，各歌人について，それぞれの短歌が教材としてどの教科書に採られているかを見てきたが，それによって，それぞれの短歌が何回教科書に採られているか，延べの回数も判明した。そこで，掲載された延べ回数の多い順に短歌を，掲載回数が3回以上のものに限って示すと，次のページの〔表6〕のようになる。

表6　短歌別掲載回数

掲載回数	短　　歌	作　者
19	その子二十櫛にながるる黒髪のおごりの春のうつくしきかな	与謝野晶子
18	白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ	若山　牧水
16	のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳根の母は死にたまふなり	斎藤　茂吉
16	幾山河越えさりゆかば寂しさの終てなむ国ぞ今日も旅ゆく	若山　牧水
15	葛の花　踏みしだかれて，色あたらし。この山道を行きし人あり	釈　迢空
13	死に近き母に添寝のしんしん遠田のかはづ天に聞こゆる	斎藤　茂吉
13	春の鳥な泣きそ泣きそあかあかと外の面の草に日の入る夕べ	北原　白秋
13	馬追虫の髭のそよろに来る秋はまなこを閉ぢて想ひ見るべし	長塚　節
11	最上川逆白波のたつまでにふぶくゆふべとなりにけるかも	斎藤　茂吉
10	なにとなく君に待たるるここちして出でし花野の夕月夜かな	与謝野晶子
10	マッチ擦るつかのま海に霧深し身捨つるほどの祖国はありや	寺山　修二
8	不来方のお城の草に寝ころびて／空に吸はれし／十五の心	石川　啄木
8	友がみなわれよりえらく見ゆる日よ／花を買ひ来て／妻としたしむ	石川　啄木
8	やはらかに柳あをめる／北上の岸辺目に見ゆ／泣けとごとくに	石川　啄木
8	くれなゐの二尺のびたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる	正岡　子規
7	昼ながら幽かに光る蛍一つ孟宗の藪を出でて消えたり	北原　白秋
7	隣室に書よむ子らの声きけば心に沁みて生きたかりけり	島木　赤彦
7	みづうみの氷は解けてなほ寒し三日月の影波にうつろふ	島木　赤彦
7	たちまちに君が姿を霧とざし或る楽章をわれは思ひき	近藤　芳美
6	みちのくの母のいのちを一目見ん一目見んとぞただにいそげる	斎藤　茂吉
6	あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命なりけり	斎藤　茂吉
6	清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき	与謝野晶子
6	やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君	与謝野晶子
6	いちはつの花咲きいでて我目には今年ばかりの春ゆかんとす	正岡　子規
6	牡丹花は咲き定まりて静かなり花の占めたる位置の確かさ	木下　利玄
5	たはむれに母を背負ひて／そのあまり軽きに泣きて／三歩あゆまず	石川　啄木
5	邑山の松の木むらに，日はあたり　ひそけきかもよ。旅人の墓	釈　迢空
5	人も馬も道ゆきつかれ死ににけり。旅寝かさなるほどの　かそけさ	釈　迢空
5	瓶にさす藤の花ぶさみじかければたたみの上にとどかざりけり	正岡　子規
5	白埴の瓶こそよけれ霧ながら朝はつめたき水くみにけり	長塚　節
5	垂乳根の母が釣りたる青蚊帳をすがしといねつたるみたれども	長塚　節
5	夕焼空焦げきはまれる下にして氷らんとする湖の静けさ	島木　赤彦
5	おほてら　の　まろき　はしら　の　つきかげ　を　つち　に　ふみ　つつ　もの　を　こそ　おもへ	会津　八一
5	あたらしく冬きたりけり鞭のごと幹ひびき合ひ竹群はあり	宮　柊二
5	おり立ちて今朝の寒さを驚きぬ露しとしとと柿の落ち葉深く	伊藤左千夫
4	いのちなき砂のかなしさよ／さらさらと／握れば指のあひだより落つ	石川　啄木
4	ふるさとの訛なつかし／停車場の人ごみの中に／そを聴きにゆく	石川　啄木
4	ヒヤシンス薄紫に咲きにけりはじめて心顫ひそめし日	北原　白秋
4	かくまでに黒きかなしき色やあるとわが思ふひとの春のまなざし	北原　白秋
4	たたかひに果てにし子ゆゑ，身に沁みて　ことしの桜　あはれ　散りゆく	釈　迢空
4	すいえん　の　あま　つ　をとめ　が　ころもで　の　ひま　にも　すめる　あき　の　そら　かな	会津　八一
4	あめつち　に　われ　ひとり　ゐて　たつ　ごとき　この　さびしさ　を　きみ　は　ほほゑむ	会津　八一
4	曼珠沙華一むら燃えて秋陽つよしそこ過ぎてゐるしづかなる径	木下　利玄
4	牛飼ひが歌咏む時に世の中のあらたしき歌大いに起こる	佐藤左千夫
3	沈黙のわれに見よとぞ百房の黒き葡萄に雨ふりそそぐ	斎藤　茂吉

3	我が母よ死にたまひゆく我が母よ我を生まし乳足らひし母よ	斎藤　茂吉
3	星のゐる夜空のもとに赤赤とははそはの母は燃えゆきにけり	斎藤　茂吉
3	ひとり来て蚕のへやに立ちたればわが寂しさは極まりにけり	斎藤　茂吉
3	灰のなかに母をひろへり朝日子ののぼるがなかに母をひろへり	斎藤　茂吉
3	桑の香の青くただよふ朝明に堪へがたければ母呼びにけり	斎藤　茂吉
3	馬鈴薯のうす紫の花に降る／雨を思へり／都の雨に	石川　啄木
3	しらしらと氷かがやき／千鳥なく／釧路の海の冬の月かな	石川　啄木
3	鎌倉や御仏なれど釈迦牟尼は美男におはす夏木立かな	与謝野晶子
3	金色のちひさき鳥のかたちして銀杏ちるなり夕日の岡に	与謝野晶子
3	海恋し潮の遠鳴りかぞへては少女となりし父母の家	与謝野晶子
3	桜の花ちりぢりにしも／わかれ行く　遠きひとり／と　君もなりなむ	釈　迢空
3	夕顔の棚つくらんと思へども秋まちがてぬ我いのちかも	正岡　子規
3	一粒の向日葵の種まきしのみに荒野をわれの処女地と呼びき	寺山　修二
3	白銀の鍬打つごときぎりぎりす幾夜をへなば涼しかるらむ	長塚　節
3	信濃路はいつ春にならん夕づく日入りてしまらく黄なる空の色	島木　赤彦
3	街をゆき子供の傍を通る時蜜柑の香せり冬がまた来る	木下　利玄
3	夕べ食すほうれん草は茎立てり淋しさを遠くつげてやらまし	土屋　文明
3	「寒いね」と話しかければ「寒いね」と答える人のいるあたたかさ	俵　万智
3	向日葵は金の油を身にあびてゆらりと高し日のちひささよ	前田　夕暮
3	木に花咲き君わが妻とならむ日の四月なかなか遠くもあるかな	前田　夕暮
3	ゆく秋の大和の国の薬師寺の塔の上なる一ひらの雲	佐佐木信綱

5．お　わ　り　に

以上，現行の高等学校国語教科書「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」において，近・現代短歌が教材としてどのように扱われているかを調べてきた。この調査から判明したいくつかの点について私見を記して，この報告を終わることにしたい。

ア，これまでの教科書との比較

「国語Ⅰ・Ⅱ」以前の国語教科書「現代国語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」（この章においてAという）については，1966年に東京電機大学出版局から発行された，文部省編の『高等学校国語指導資料・教材と指導法』に簡単な調査ではあるが記されている。これには当時使用されていた15種類の「現代国語」の教科書のうちで何種類の教科書が，ある歌人の短歌を教材として採っているか，その教科書の数と，何回載っているか，その回数を記している。

筆者は，1978年に改訂された「高等学校学習指導要領」に基づいて，その時に新しく設けられた「国語Ⅰ・Ⅱ」の教科書（この章においてBという）における短歌の扱いについて，今からちょうど10年前の1986年に，「高等学校用教科書『国語Ⅰ』・『国語Ⅱ』における近代短歌教材」と題して，「聖徳学園岐阜教育大学紀要」第13集において，今回とほぼ同様の調査をして発表している。

それと，今回の「国語Ⅰ・Ⅱ」（この章においてCという）についての調査の結果との3つ

を比較して，ある歌人の短歌を何種類の教科書が教材として採っているか，その教科書の数と，また，その歌人の短歌が何回載っているか，その延べ回数の推移を調べてみると，次の〔表7〕のようである。

表7　短歌の採り上げ方の推移

A，「現代国語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」

晶子	14種	45回
茂吉	14種	41回
啄木	13種	29回
赤彦	13種	27回
牧水	13種	23回
子規	12種	33回
白秋	12種	30回
節	10種	24回
利玄	10種	22回
左千夫	9種	21回
迢空	8種	21回
文明	4種	15回
空穂	4種	11回
八一	4種	7回
夕暮	3種	9回
憲吉	3種	9回

B，前回の「国語Ⅰ・Ⅱ」

茂吉	17種	91回
啄木	16種	44回
晶子	16種	43回
白秋	15種	39回
牧水	14種	37回
迢空	12種	31回
赤彦	9種	22回
子規	9種	19回
節	8種	19回
柊二	7種	18回
芳美	6種	15回
文明	4種	14回
左千夫	4種	10回
八一	4種	9回

C，今回の「国語Ⅰ・Ⅱ」

茂吉	25種	101回
啄木	25種	67回
晶子	25種	66回
牧水	21種	48回
白秋	20種	58回
迢空	19種	39回
修司	15種	35回
節	13種	34回
芳美	13種	24回
子規	12種	35回
赤彦	12種	30回
八一	11種	22回
柊二	10種	21回
利玄	7種	16回
左千夫	6種	13回
文明	5種	13回
万智	5種	13回
隆	5種	9回
夕暮	5種	9回
幸綱	4種	4回
勇	3種	12回
信綱	3種	7回
あき子	3種	6回
邦雄	3種	4回
建	3種	4回

Aの「現代国語」・Bの「国語」・Cの「国語」の3種のうち，Aの「現代国語」は，Ⅰ・Ⅱ・Ⅲと3冊からなっているのに対して，BとCの「国語」は，Ⅰ・Ⅱの2冊からなってい

る。そして，各社から発行された教科書の種類も，Aの「現代国語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」が14種類であったのに対して，Bの「国語Ⅰ・Ⅱ」は17種類あり，今回のC「国語Ⅰ・Ⅱ」では26種類と増えている。このようにA・B・Cは相違があるから，厳密にいうと比較の対象にはなりにくいが，この3つを並べることによって，大まかな傾向は察知できると考えられる。

そこで，各教科書にどの歌人の短歌が何種類の教科書に延べ何回載っているかを，便宜の上から3種類以上の教科書に載った歌人をA・B・Cの中から取り出してみると，Aでは16名，Bでは14名，Cでは22名になる。そこに並んだ歌人を見ると，大体は同じような順で歌人が並んでいるが，多少の違いも見られる。

すなわち，Aにおいて4種の教科書に延べ11回掲載された窪田空穂は，Bでは1種類の教科書に2首が，Cでは2種類の教科書に1首ずつ計2首が載るだけになっている。中村憲吉の場合は，Aでは3種類の教科書に延べ9回載ったが，BやCでは教科書に載らなくなっている。Aだけに歌が載って，BやCには歌が見えなくなった歌人としては，中村憲吉・落合直文・岡麓・古泉千樫・岡山巌・鹿児島寿蔵の6名の歌人がある。また，Aには見られず，Bになって歌が載ったが，Cになって見られなくなった歌人としては，生方たつゑ・前川佐美雄の2名の歌人がある。

それに代わって，新しく載るようになった歌人を見ると，Aに見られなかった宮柊二の歌が，Bでは7種類の教科書に18回載り，Cでは10種類の教科書に延べ21回載るようになっている。近藤芳美の歌もAには見られないが，Bでは6種類の教科書に15回，Cでは，13種類の教科書に延べ24回掲載されている。寺山修司の場合は，Aには見られず，Bでは1種類の教科書に2首載ったのみであったが，Cでは15種類の教科書に延べ35回採用されている。岡井隆の場合も，Aには見られず，Bでは1種類の教科書に1首載ったのみであったが，Cでは5種類の教科書に延べ9回採用されている。

俵万智の場合は，AにもBにも見られなかったが，Cになって一挙に5種類の教科書に延べ13回掲載されている。それまで載っていなかったのにCの調査で3種類以上の教科書に載った歌人には，俵万智のほかに次の4名がある。

佐佐木幸綱	4種類・4回
馬場あき子	3種類・6回
塚本　邦雄	3種類・4回
春日井　建	3種類・4回

A・B・Cの3回とも掲載された歌人の場合でも，釈迢空の場合は，Aにおいて8種類の教科書に延べ21回載っていたのが，Bでは12種，31回，Cになると19種，39回とだんだんに増えており，会津八一の場合も，Aでは4種類の教科書に延べ7回，Bでは4種，9回であっ

たのが，Cになって11種，延べ21回と増えている。

以上のように，Aの「現代国語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」と，Bの1986年当時に使用されていた「国語Ⅰ・Ⅱ」と，Cの現在使用されている「国語Ⅰ・Ⅱ」とを比較してみると，大体においては，登場する歌人や，その歌人の短歌が掲載される度数は同じような順位を示しているが，B，Cと時代が下るにつれて，昭和の歌人，特にCにおいては第2次世界大戦後の歌人の作品が多くなってゆき，その分だけ明治・大正期の歌人が姿を消したり，掲載される回数が減ったりしている。戦後の歌人の中でも，特に注目されるのが，Bでは1種類の教科書に2首載ったのみだったが，Cになって15種類の教科書に延べ35回採用されている寺山修司と，AにもBにも見られなかったが，Cになって一挙に5種類の教科書に延べ13回掲載されている俵万智とである。このような新しい歌人の作品が教科書に載ることによって，学習する生徒たちに短歌というものが，身近な感じで学習できる，親しみやすいものになるであろう。

主な作歌活動の時期が第2次世界大戦以前の歌人であるにもかかわらず，釈迢空・会津八一の両名の短歌が時を追って多く掲載されるようになってゆくのは，その独特な歌風が広く認められるようになってきたということであろう。

Aに比べて，B，Cと時代が下るにつれて昭和期に主な活躍を示した歌人の数か増え，特にCにおいては，第2次世界大戦後の歌人の作品が多くなってゆくことは事実であるが，全体として見ると，A・B・Cのいずれの教科書においても，明治・大正期に主な活躍を示した歌人の作品が主流を占めていることにかわりはない。この点は，同じ韻文でも，昭和期の作品が大半を占めている詩教材の場合とは大きな開きがある。同じく短詩型といわれる，俳句の場合と比べても，教材に水原秋桜子・中村草田男・山口誓子・加藤秋邨・石田波郷・中村汀女・金子兜太らの昭和期の俳人が占めている比重は短歌と比べてはるかに大きい。短歌は詩や俳句と比べてはるかに古い歴史を持つ文学ジャンルであるという特殊な事情も考慮しなくてはならぬのであろうが，「国語Ⅰ」「国語Ⅱ」に昭和期の短歌作品，戦後の新しい作品をどの程度載せるかは，さらに検討を要する問題であると考えられる。

その点において，三省堂の「国語Ⅰ」（「国語Ⅱ」には短歌を載せていない）が「現代の短歌」と題して，近藤芳美・岡井隆・馬場あき子・寺山修司・河野裕子・李正子の6名の短歌を3首ずつ，計18首載せて，明治・大正をも含めて，戦前の作品を1首も掲載していないのは，大胆な試みで注目される。明治書院の「高校生の国語」Ⅰ・Ⅱには，それぞれ15名の歌人の短歌を1首ずつ，2冊を合わせて30首の短歌を載せているが，その中に11首の戦後の作品があるのも注目される。

イ，斎藤茂吉の短歌の重視

斎藤茂吉の短歌は，Aにおいても14種類あった当時の教科書のすべてに採られ，延べの回数にして41回と，与謝野晶子の14種類の教科書，45回に次いで多く載せられていた。10年前

のBでは17種類の全部の教科書に載ったのは，茂吉だけである上に，延べの回数を見ると，茂吉は91回で，それにつづく啄木は44回，晶子43回，白秋39回，牧水37回となっており，茂吉の延べ掲載回数が啄木や晶子の倍以上となっている。今回の調査でも，茂吉の短歌は，現代短歌のみにしぼった三省堂の「国語」には載っていないが，あとの25種類の教科書のすべてに掲載され，延べの回数も 101回と，つづく啄木の67回，晶子の66回，白秋の58回，牧水の48回と比べて圧倒的に回数が多い。

茂吉の場合，処女歌集『赤光』（大元）に収められた「死にたまふ母」などの歌の数々から，晩年の『白き山』（昭24）に載った「最上川逆白波のたつまでにふぶくゆふべとなりにけるかも」などの作品に至るまで，長い年月にわたって数多くの短歌を詠んでおり，それが愛誦されて，高い評価を受けていることを考えると，このように高等学校の「国語」の教科書に多く取られているのもある程度は予想できることではあるが，彼につづく啄木や晶子と比べて30数首の差をつけて，圧倒的に多いのはなぜか。

その理由として考えられるのは，茂吉の短歌は「連作」の形式で，15首とか10首とか，まとめて取り上げられていることにある。そこで，次に，短歌の連作ということについて考察することにする。

ウ，連作短歌の掲載について

高等学校の国語教科書における短歌教材は，ほとんどの場合，たとえ１つのまとまった主題のもとに多くの短歌を構成を考えて配列した連作形式で作られた作品でも，連作の中の部分ということは考慮せずに，１つの独立した作品として採用し，学習する場合も，その１首を単独に扱う場合が多い。

茂吉の「死にたまふ母」という連作について考えてみると，良く知られているように，この作品は，茂吉の生母，守谷いくの死について歌ったもので，大正２年（1913）５月16日，母危篤の報を受け取った東京に住む茂吉は，ただちに山形県上山市金瓶の生家へと向かう。そこで数日のあいだ母を看病したのちに，母の死を迎え，葬儀をすませ，しばらく滞在したのち，同月30日に帰京するまでを，「其の一」から「其の四」までの４部に分けて，意識的に連作の形式で発表した作品である。

この連作は，その１首１首を見ても，

死に近き母に添寝のしんしん遠田のかはづ天に聞こゆる
のど赤き玄鳥ふたつ梁にゐて垂乳根の母は死にたまふなり

などの優れた短歌が多く見られる。

これらの短歌は，母の死を前にした茂吉の高揚した感情が，卓抜した表現技巧によって高

い調べで歌い上げられている。このような作品を１首１首，丁寧に学習させることは，高等学校の国語の授業において大切なことであることはいうまでもない。しかし，もし，これを連作として教材にした場合には，別な教育的な効果を与えると考えられる。

「死にたまふ母」の場合でいうと，４部構成，59首の連作として，１つにまとまることによって，１首１首，単独に掲載された場合とは違って，映画や小説のように物語性を持つに至り，単作として鑑賞した場合とは別の感動を大きな振幅で読む者に与えると考えられるのである。

連作の短歌は，古くは「万葉集」における大伴旅人，明治期では正岡子規など，例が見られるが，短歌史の上で，「連作」形式の意義を説き，みずから意識的に連作の形の作品を数多く詠んだのは伊藤左千夫である。彼は「連作趣味」（明35），「再び歌之連作を論ず」，（明35），「連作乃歌」（明36），「連作の歌に就いて」（大２）など，数多くの歌の連作の効用を説いた歌論を発表しており，作品としても，「鎌倉回顧」６首（明33），「二月二十八日九十九里浜に遊びて」７首（明42），「ほろびの光」５首（大元）など，彼の代表作とされるような短歌を連作の形で発表している。

左千夫から短歌の指導を受けた斎藤茂吉も，連作についての歌論を，「連作」（明45），「短歌連作の由来」（大元～８），「連作論」（昭17）など，たびたび発表しており，作品としても，処女歌集『赤光』（大２）において，「死にたまふ母」59首，「おひろ」44首，「おくに」17首などの力作が収められており，以後の歌集においても，作品を単作として発表することは稀で，多くの場合，連作形式で発表している。『赤光』，特に「死にたまふ母」の成功により，それ以後，歌壇においては短歌の発表は，連作の形式によって発表するのが普通になって今日に及んでいる。

こうした事情を考えると，茂吉の「死にたまふ母」などの作品を，数種類の教科書が何首かまとめて取り上げていることは，意義ある試みとして注目される。

茂吉の作品を何首かまとめて取り上げているのは次の６種類の教科書である。

教育出版	『国語II』	「死にたまふ母」	15首
日本書籍	『新版高校国語II』	「蚕のねむり」	８首
学校図書	『高等学校国語Ｉ』	「死にたまふ母」	８首
大修館	『現代の国語II』	「死にたまふ母」	６首
大修館	『高等学校新国語II』	「死にたまふ母」	５首
角川書店	『高等学校国語II』	「死にたまふ母」	５首

この６種類の教科書は「死にたまふ母」の連作59首を，まるごと掲載しているわけではなく，多いのでも15首と原作の４分の１程度に過ぎないが，教科書のページ数にも，国語の授業時間数にも制約のあることを考慮すると，これが精一杯の努力の結果であろうと評価できる。

なお，茂吉以外の歌人の連作を取り上げた教科書に，角川書店の『高等学校国語Ⅱ』があり，ここでは「藤の花」と題して，

瓶にさす藤の花ぶさみじかければたたみの上にとどかざりけり

をはじめとする連作10首のうちから6首が掲載されている。もともと，この連作には標題がなく，詞書が付けられていたのだが，この教科書では，「藤の花」という題を付したあとに，「夕餉したため了りて仰向けに寝ながら左の方を見れば……」で始まる 145字からなる詞書がそのまま掲載されている。一連の短歌を6首並べ，さらに詞書を付すことによって，これを読む者は，その時の子規の心情にかなり近づくことができると考えられる。

エ，短歌を作らせることについて

Gの三省堂の「明解国語Ⅰ」は，〔表現七〕として，「『短歌』を作る」の章で，橘曙覧の「たのしみは」8首と，吉井勇の「寂しければ」9首を掲載し，「課題一」として，「右の歌を参考に，自分なりの『たのしみは……時』という歌を二首以上作ってみよう。」「課題二」として，「右の歌を参考に，自分なりの『寂しければ……』という歌を二首以上作ってみよう。」と短歌を作ることを求めている。

短歌の単元の終わりに付けられた「学習の手引き」には，「情景を想像し，歌に込められた作者の心情を考えてみよう。」「短歌の中から共感したものを1つ選び，鑑賞文をまとめよう。」「句切れはどうなっているか。」などと，鑑賞を主としたものがほとんどである中で，短歌を作ることを求めた，この教科書の行き方は注目される。「たのしみは」の歌が8首，「寂しければ」の歌が9首並べてあり，その歌が日常生活の中で生まれた感懐を詠んだ，親しみやすい歌が多いので，こんな歌なら自分でも作れると，多くの生徒が短歌というものを身近に感じるきっかけになる，興味ある試みとして評価できる。

オ，主題別に分けて掲載することについて

Sの旺文社の「新国語」はⅠだけに近・現代短歌を載せるが，短歌の配列を，「愛」と題して与謝野晶子ほか4名の短歌を，「青春」と題して，石川啄木ほか3名の短歌を，「人生」と題して若山牧水ほか3名の短歌を，以上10名の短歌を2首ずつ，計20首掲載している。

Tの旺文社の「高等学校国語」は，Ⅰだけに近・現代短歌を載せるが，短歌の配列を，「恋」と題して，与謝野晶子ほか4名の短歌を，「旅・自然」と題して，石川啄木他6名の短歌を，以上10名の短歌を2首ずつ，計20首を掲載する。

Xの第一学習社の「高等学校新国語」は，Ⅰだけに近・現代短歌を載せるが，短歌の配列を，「青春」と題して石川啄木の短歌，「愛」と題して与謝野晶子の短歌，「死」と題して斎藤

茂吉の短歌，「旅」と題して若山牧水の短歌，「動物」と題して北原白秋の短歌，「不思議」と題して葛原妙子の短歌を，それぞれ3首ずつ，計18首掲載している。

その歌人の代表作，名作とされるような作品をただ載せるのではなく，青春・愛・旅・動物などと，主題別に分けて掲載する試みも，短歌を学ぶ生徒に身近なものと感じさせる試みとして評価できる。

カ，逆年代順の配列について

尚学図書のU「新選国語Ⅰ」では「近代の短歌」と題して，寺山修司・斎藤茂吉・島木赤彦・石川啄木・若山牧水・与謝野晶子と，活躍の時期が今日に近い歌人を先に，遠い歌人を後にと，いわゆる逆年順に配列している。これはV「標準国語」・W「新国語」でも同様である。時代を追った配列と，このような逆年順とを比較して，どちらが良いとは簡単に決められないが，他に例を見ない，珍しい試みといえよう。

キ，古典和歌と近・現代短歌を同じ単元で扱うことについて

Eの学校図書の「基礎国語」はⅠだけに近・現代短歌を載せるが，短歌を扱うのに，「和歌の流れ」と題して，古典和歌と近・現代短歌を分けずに同じ単元で，男女の愛を歌った「愛・その一」・親子の愛を歌った「愛・その二」・「自然」の三つに分けて，「万葉集」「古今和歌集」「新古今和歌集」などの和歌に続けて近・現代短歌を並べている。

これは他の教科書に見られない取り扱い方で，たとえば男女の愛を歌った「愛・その一」の場合の

あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る　額田王
思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを　小野小町
たまのをよ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする　式子内親王

のすぐ後に，

何となく君に待たるるここちして出でし花野の夕月夜かな　与謝野晶子
「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日　俵万智

などの歌が並んでいるのを見ると，短歌という形式がいかに古い歴史を持った伝統的な形式であるかを読む者に意識させ，また，与謝野晶子の「何となく」の歌が「古今和歌集」の小野小町の歌や「新古今和歌集」の式子内親王の和歌と近いものであることなどを感じさせる。こうして，「和歌の流れ」を自然に理解させる。珍しい，興味ある試みといえよう。

〔備考〕東京書籍の「国語Ⅰ」には，随筆の単元に俵万智の筆になる「愛の消印」と題する文章が載っていて，そこに万智の短歌5首が入っているが，この報告は短歌教材のみに限ったものなので，随筆教材の中のこの5首は入れていない。